COBALT-SERIES

前田珠子

空の呪縛



集英社

COBALT-SERIES

空(くう)の呪縛

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

空(くう)の呪縛

前田珠子

集英社

空の呪縛

目次

恋獄の緒……7

月を、恋う……95

あとがき……214

空の呪縛
登場人物紹介



シラン

精霊たちと心通わせ、夢のなかを行き来する能力を持つファナルシーズの友人。

フィオルシェーナ

ファーリッシュ王国の美しい王女。奇跡の生還を遂げ、数奇な運命を辿る…！


リアンリード
「一位」と呼ばれる紫属の
柱神。水難事故に遭った
フィオルシェーナを救う。
ファナルシーズ
アストニア皇国第四皇子
にして次期王太子。輝く
美貌と才知の持ち主。

イラスト／明咲トウル

恋獄の緒

プロローグ

アズアーダ王国の北の国境近くに広がる『針の森』――針葉樹の森の中、人間の目には映らぬ空間に、小さな屋敷が建っていた。

屋敷の住人と呼べるのは、ただひとり。

やはりほとんどの人間の目には触れない友人たちに囲まれて、静かに暮らす屋敷の女主人は、『小さき友』と呼ぶ精霊たちの知らせを受け、不意の客人の訪いを知った。

「まあ、ワン・ヤーンったら。いつも突然なのだから……けれど、ちょうど良かったわ」

微笑みながら、屋敷の女主人は厨房に向かい、窯から焼き上がったばかりの胡桃と肉の入ったパイを取り出した。

予知して作ったわけではないが、偶然でもない。

ワン・ヤーンという名の同朋に関してだけは、先触れなしに、何となく事前に感じ取れることが多いのだ。

そう……意味もなく、無性に同朋が以前褒めてくれた料理を作りたくなる、など。
この屋敷を訪ねて来てくれる、他の同朋に対しては、滅多に働かないその勘の意味も、本当のところ、彼女にはわかっている。
理由はただひとつだ。
愛すべき友人は、時折、彼女が忌避する話を、そうと知りつつ持ち込むことがあるのだ。
今日がそうでないことを願いながら、屋敷の女主人であり、世界の天と地の狭間である『空』を支える百八の御柱のひとりである彼女は、友人を迎えるために茶の用意を始めた。
だが……願いはかなわなかった。同じ御柱――柱神である友人は、まさにそれをこそ目的に、その日、彼女を訪れたのだ。

◈　◈　◈

「どう考えてもわからないわ」
緋属の柱神にふさわしい、豪華な緋色の巻き毛をかきあげながら、ワン・ヤーンは茶の入ったカップに手を伸ばした。
その肌は小麦色、瞳もまた燃えるような緋色だ。

情熱的な気性そのままの炎のような女性の柱神は、なんとも苛立たしげに、年長の友人に目をやった。

屋敷の女主人の属性は紫――真っ直ぐな銀髪に、透けるような白磁の肌、極上の紫水晶の瞳を持つ、たおやかな美女である。

その外見は、人間であるなら十代後半から二十代前半といったところだ。しかし、そうとは思えぬ落ち着いた雰囲気と、見る者を魅了する圧倒的な存在感は、彼女の生きてきた年月と経験を物語っている。

彼女は実に五世紀以上の時を生きている、紫属第三位の長老――三位様と呼ばれる女性なのだ。

比べて、ワン・ヤーンは少し若い。二世紀半を生きる緋属の柱神は、「なにが？」とも問い返さない年長の友人を前に、深いため息をついた。

「本当に、わからない。あなたほどに美しく聡明な方が、なぜ、生の喜びを放棄するような生き方を選ぶのか……。なにもわたしや、他の年若い娘たちのように、恋に生きろと言っているわけではないのよ？　わたしだって、自分が少々……というより、かなり惚れっぽいという自覚はあるし、それが厳格な年長者の方々の目に、軽薄に映っていることはわかっているのよ？けれど、あなたの場合は、すこし違うように思えてならないの」

心から心配してくれているのがわかる、年若い友人の言葉に、女主人は微笑で応えた。
「恋を否定しているわけではないわ……けれど、たった一度の恋ゆえに、愛するひとを苦しめた、愚かな娘を知っているから、わたしは恋をしたくないの」
「たった一度の恋？」
尋ねられ、彼女はこくりとうなずいた。
「そう、ただ一度の恋……いいえ、あれは恋とは呼べないわ。愚かな……本当に愚かしい娘。愛するひとを苦しめることしかできなかったあの娘のことを忘れられない限り、わたしは恋などしたくないわ」
嬉しく楽しい恋を勧める同朋に諦めてもらうために、彼女は語り始めた。
忌まわしいまでに身勝手な、ひとりの娘の話を――。

1　香しき蜜の国

香しき蜜の国――資源と気候に恵まれたファーリッシュは、建国当時より、国内は勿論、国外からもそう呼ばれる、まさに蜜の国だった。

金剛石や鋼玉・金を産出する鉱脈を数多抱え、また平地部分においては豊かな黒土に保証された農作物の恵みを受けて、その国力は増すことこそあれ、減じることはないと信じられていた。

だが、甘き蜜に虫が集まるように、安寧に微睡む王家には、牙や爪を巧妙に隠し持つ者たちが集った。

その牙や爪に気づかなかった王を暗愚と言い切るのは容易いが、当時、王の周辺にいた者たちの誰も、のちのことを予想し得ぬまま、その多くが滅びの道を辿ったことを思えば、一方的に責めるのは酷なことかもしれない。

一国の舵取りの責任を負う国王が、怪しげな動きに気づけず、そのせいで国そのものを危う

くしたことに関しては、無論、責のあること明白であったろうが、長いこと、内憂にも外患にも縁がなかった当時のファーリッシュの中枢は、楽天的な材料のみを王に伝え、また危機感のない王も、それを信じて疑わなかった——という報告が残っている。

その結果生じた対応の遅れが、なにを生み出したのか——過去に起こった事実に対し、仮定を用いるほど空虚なことはないというのが口癖の官僚にしても、それでも「あのとき、もし」と酒量が過ぎた時など、思わず口にしてしまうほど、悲惨な時代の到来を招くこととなった。

忠実であるはずの家臣の中に、王位の簒奪を企む者が出現したのである。

安寧の世に油断していた王を操り、同時にそんな王に反感を抱く権力者たちをも操り、その男はついには両者をかみ合わせ、漁夫の利を得るに至った。

それが、十一年前のこと——。

甘言で協力者を募った男は、王都を征し、王家に縁のある者たちを狩りにかかった。

王位継承権を持つ者がひとりでも残っている限り、男の王位は絶対的なものだとは、神殿から保証されないからだった。

しかし——男は、甘く騙しやすいと見くびり、罠にかけ、命を奪った王の資質を、実のところは見抜いていなかった。

殺し、奪うことしか知らぬ男には、治世に必要な資質が絶対的に欠けていたのだ。

かくして民心は離れ、男は孤独な死を迎えることになる。

男に悔いはなかったが、なぜ自身がうまくやれなかったのかだけが謎として残った。

答えたのは、男が葬った王の血を引く王子だった。

「お前は富や利にしか目を向けなかった。お前にとっては、我が父は安寧に身を委ねた怠惰な君主にしか見えなかったかもしれないが、あの方は常にこの国に住む民人のことを忘れたことはなかった。お前は民人のことを考えもしなかった。それが、この結果をもたらしたのだ。なぜ、国を追われた我々が、ここにこうしてお前の前に立っていられると思う……全ては民の力あってのことだ。民あってこそ、国がある。お前はそれを見つけ損なったのだ」

「民だと？　なんと馬鹿らしい答えを口にするのだ！」

そんなものは蟻と同じ小さき存在だ。

最期まで、男の認識は変わらなかった。そうして、男は首を刎ねられる瞬間まで、自身が「甘い」と信じる相手への糾弾をやめなかった。

「民であれ臣下であれ、肉親であっても、我欲がある限り裏切りはある！　王子よ、わたしの言葉の真実を、お前は遠からず思い知ることになるだろう！」

「裏切りの有無は、受け取るこちら側の心によるもの！　なにもかも、誰も彼もがお前と同じと思うな！」

それは決別なのか、誓いなのか――。
残った事実はひとつのみ。
ファーリッシュに、正統なる王家が復活したのだ。

◈　◈　◈

復興間もない第二復活ファーリッシュ王国にあって、民が他国に誇れるものは三つあった。
まず第一に、簒奪者を退け、王国に平和を取り戻した国王シトラーゼン二世。疲弊した民のために王宮の蔵を開放した彼の人気は高い。
第二に、簒奪者たちに宝石の発掘権を一時独占されていたがゆえに、民が磨かざるを得なくなった彫金の技術――いまでは貴族による不当な独占市場はなくなったため、民が自由に商うことが許されるようになった宝飾品は、ファーリッシュ独自の意匠もあり、徐々に人気を呼びつつある。
第三が、十年前、簒奪者一派の追っ手から逃れる途中、海で命を落としたものと信じられていたものの、奇跡的に生還を果たした王女フィオルシェーナの存在である。
嵐に沈んだその船に、乗っていたほとんどの者が命を落とした中、生存が絶望視されていた

王女と思われる少女は、さまざまな調査を重ねた結果、本人に間違いないことが判明し、ほんの半年ほど前に王国に帰還したばかりだ。

いや、王女というのは正確ではない。

彼女は先代国王の弟であるカルクス大公の一人娘であり、王族の一員ではあったが、『王女』ではなかったのだから。

しかし、前の内乱の折、主立った王族が命を落とした結果、第三位の王位継承権を持つこととなった彼女は、王女と呼ばれるようになった。

その髪は、冬の澄んだ夜に輝く月の光を紡いだがごとき銀、瞳は南の海を思い起こさせる明るい青――白磁を思わせる肌、細く優美な体つきもあって、十五歳の若さながら、民を魅了している。

しかし、彼女を思う時、民が最も惹きつけられるのは、その身に纏う神秘だ。

十年前、散り散りに王都を脱出した王家縁の者を捜索するため、新国王は戴冠すると同時に、さまざまな手を尽くしたという。

そのほとんどが、無惨な死を遂げたという報告で終えた中、生存が絶望視されていたフィオルシェーナだけが戻ってきた――しかも、精霊の篤き加護を得て。

彼女が歩く場所は、彼女が望まぬ限り雨が地面を濡らすことはない。夏の日差しが強い日で

も、彼女が行く先では必ず、涼やかな風が吹く。大雨で氾濫した川に呑み込まれた子供を助けるために、彼女が何事かを叫んだ瞬間、荒れ狂うさまが嘘のように鎮まり、水が溺れた子供を岸まで運んだという逸話さえある。

美しき奇跡の姫――。

誰が最初に口にしたのか、いつしか彼女はそう呼ばれるようになった。

◇　◇　◇

「風霊たちが水霊たちと戯れているわ。雨が来そうよ、ナーナ。洗濯物の取り込みがまだなら、急いだほうがいいかもしれないわ」

窓辺に立っていた女主人の言葉に、侍女であるナーナ――ナナレイダは驚いた顔でうなずいた。

「本当ですか、姫様。ここ数日、雨が続いていたので今日はたくさん洗ってあるはずなんです！　わたし、急いで知らせてきますね」

ここで働くようになって、まだ二カ月目のナナレイダは、貴族とはいえ下級の出で、家ではそれなりに家事にも従事していたらしく、こうした際の反応は早い。

「ええ、そうして。せっかく洗ったのに、台無しになるのはあんまりだわ」
「はい、ありがとうございます、姫様！」
そう叫んで、元気な侍女が扉に向かって駆け出したときのことだった。
扉を叩く音が聞こえた。
ナナレイダの顔に、緊張が走る。
この時間、彼女の女主人に面会の予定はなく、にも拘わらず、咎められることなくこの部屋を訪れることのできる人物は限られているからだ。
つまり、このファーリッシュにおいて、彼女の主であるフィオルシェーナ以上に高貴な身分とされる人物――それは現在ふたりしか存在しない。
果たして、約束なしに訪れた人物は、そのふたりの内のひとりだった。
国王シトラーゼン二世。フィオルシェーナの従兄である。
「こ、これは陛下……！」
緊張のあまり、声が上擦るナナレイダに、主人であるフィオルシェーナは声をかけた。
「ナーナ、ここはいいから、知らせておいでなさい。わたくしだって、お茶ぐらいは淹れられるわ」
そうは言われても、国王そのひとを放り出してこの場を離れることはできない。

「いえ、とんでもありません！」

そう言いながらも、女主人の予言の正確さをよく知る侍女は、窓の外に目を向けずにはいられなかった。

その様子に気づいたのだろう、訪問者である国王は、にこやかに彼女に退室の許可を出した。

「フィオルに言いつけられたことがあるのなら、早く行くがいいよ。わたしも、彼女手ずから淹れたお茶を久しぶりに飲みたいことだしね」

気さくな笑顔で言われても尚、悩む様子を見せていたナナレイダだったが、フィオルシェーナの再度の「大丈夫だから」という言葉に後押しされ、「失礼します！」と断って出て行った。

残された格好になった、ふたりがいる部屋の空気が、がらりと変化したのは、ナナレイダの姿が扉の向こうに消えた瞬間だった。

険悪になったわけではない。

逆だ。

一気に親しげな空気が増したのである。

「ナナレイダといったか……あの娘とはうまくいっているようだね」

国王としてではない、従兄としてのシトラーゼンの言葉に、「ええ」とフィオルシェーナは素直にうなずいた。

「故郷で家事に従事していたせいか、わたしが生活に密接するようなことを口にしても咎めるようなことは言わないわ。以前の侍女たちがこぞって、姫たる者、そのような雑事を気にとめる必要はないと……いいえ、そんなことを気にするのは姫君らしくないと、逆に咎めていたことを思うと、本当につきあいやすい、気持ちのいい娘よ。あの娘を配してくださった、お従兄さまには、本当に感謝しているわ」

言いながら、フィオルシェーナは沸かしたばかりの湯で、上質の茶を淹れる。

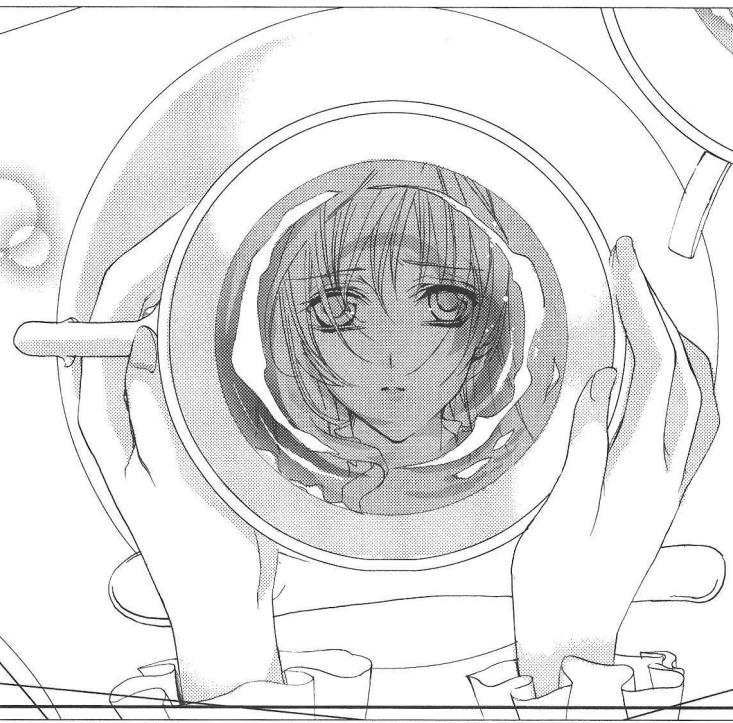
差し出されたティーカップを受け取り、シトラーゼンはかぶりを振った。

「礼を言われるようなことじゃない。逆に謝りたいぐらいだよ……君が乗った船が沈んだと聞いた時、なぜあんなにも早々と諦めてしまったのか……諦めずに捜し続けていれば、もしかしたらもっと早く、君を見つけられたかもしれないのに……もし、そうなら、君に要らぬ不安を抱かせることもなかっただろうにと……そう思うと」

シトラーゼンの声には、深い悔恨の響きが宿っていた。

そんな従兄の正面の椅子に腰を下ろし、フィオルシェーナは「いいえ」と答えた。

「お従兄さまは気に病みすぎよ。わたしは、きっとこの十年、酷い扱いを受けて暮らしてきた



わけではないと思うもの。以前の侍女たちは、確かにわたしが厨房に立つことに抵抗を覚えないというだけで、同情したりしたものだけれど……でも、なんとなくだけれど、わたしは不幸ではなかったと確信できるの。実際、こうやって、お従兄さまにお茶を出すこともできて、その感想をお聞きすることもできるわけだし」

彼女の言葉に、ほんの少し間を置いて、シトラーゼンは「そうだな」とうなずいた。

彼らの間に流れる微妙な空気には、理由がある。

美しき奇跡の姫と呼ばれ、国民の敬愛を一身に受けるフィオルシェーナには、実は乗っていた船が沈んでから、再びファーリッシュに戻るまでの記憶がいっさいないのだ。

それでも、体に刻みこまれたそれは消えないのか、彼女は茶を淹れることも、料理を作ることも、洗濯や掃除ができることも覚えていた。

それは、生き延びた幼い彼女が、そうしたことをする必要のある環境で育てられたという何よりの証だった。

そして、戻って間もない彼女が口にした『わたし』という一人称――。

今でこそ、気心の知れたシトラーゼンに対してしか口にしないようになったものの、戻った当初はそれを含めた奔放な口調に、親族は胸を衝かれる思いを味わったものである。

そうした事情を鑑みるだに、シトラーゼンは彼女の楽観的な推測を鵜呑みにはできないと思

ってしまうのだ。

フィオルシェーナと思われる少女を保護していると知らせてきたのは、隣国クシュナの海沿いの街の富豪の当主だった。

シトラーゼンがかつての内乱の折、散り散りになった王家縁の者たちを捜していることは、すでに有名な話であり、偽者も多数出現したため、彼は慎重に調査を進めさせた。

特に彼女は、幼くして海で命を落としたと信じられていたから尚更だった。

結果、フィオルシェーナが真実、カルクス大公女であることまでは、意外と簡単に判明したわけだが、その保護者であるという富豪の身元がなかなか洗えなかった。

徹底的に調査しようとした矢先に、やんわりとだがクシュナの国王から牽制が入ったという事情がある。

再建して間もないファーリッシュに、協力者である隣国の王を敵に回して渡り合うような余力はなく、結局口を噤まざるを得ない状況となってしまったのだが、シトラーゼンには懸念があった。

発見の報を受け、確認のために彼が人を差し向けた際、フィオルシェーナには一切、外的損傷の痕はなかったということだ。

頭などを強く打った時、記憶の混乱、もしくは消失といった症状を示す者がたまに現れるこ

とは、それなりに知られている。だが、稀な例として、心が耐え難いと判断するような経験を味わったとき、精神を壊さないために、自ら記憶を封じるという症例があることも、シトラーゼンは知っていた。

もしかしたら、フィオルシェーナは心に深い傷を負い、それゆえに記憶を封じたのではないのか――。

もしそうなら、彼女にそんな傷を負わせた者は決して許さない。

ようやく取り戻した、数少ない血族である少女を、二度と嵐の中には放り出さない。

強い覚悟を胸に、シトラーゼンは目の前で微笑む少女に、お茶のお代わりを所望した。

◈　◈　◈

侍女のナナレイダが夢見がちな少女で、ロマンティックな話に目がないことは、少しのつきあいでもわかっていたから、その話題が持ち出された時、フィオルシェーナはそれなりに警戒していた。

けれど、夢見る少女のきらきらと輝く瞳で、真正面から問いかけられた時には、正直戸惑った。

「姫様。陛下とご結婚という話は、絶対に絶対にあり得ないのですか？　お従兄妹同士の婚姻が、法で禁じられていることは存じてますけど、本当のところは、陛下と姫さまはもう少し遠いご関係でいらっしゃるのでしょう？　ならば、法で禁じられた間柄ではないのでは……？　なにより、あんなに仲睦まじくていらっしゃるのだし……」

ロマンスを愛すると同時に、自分のことも深く愛してくれている侍女の性格を知るフィオルシェーナは、苦笑まじりに、自分たちの複雑な血縁関係を説明することにした。

「確かに、陛下のことをお従兄さまと呼んでいるのは便宜上のことで、わたくしの父は前の陛下の弟ではなく、実のところは叔父だったから、正確には再従兄に当たられる方なのだけれど、同時にあの方とわたくしは母方でも再従兄妹に当たるの。二重の再従兄妹同士は従兄妹に等しいと見なされるから、婚姻は許されないのよ。まあ、そのことは生まれて物心つくと同時に教えこまれるから、わたくしもお従兄さまも、考えたこともないわね」

その言葉に、ナナレイダは心底がっかりしたように息をついた。

「そうなのですか……おふたりがあまりにお似合いだったものですから、そうなられたら、どれほど嬉しいことかと思ってしまって……」

残念そうなナナレイダの言いたいことは、わかる。

表立って誰も口にはしないが、帰国してそろそろ一年になるフィオルシェーナのもとには、

国の内外から数多くの縁談が舞い込んで来ているのだ。

数少ない王位継承権保持者にして、精霊たちの加護篤き王女である彼女には、小さくはない関心が寄せられている。かつて以上に、彼女の価値は高まっていた——政略の駒として用いるのに、これ以上はないというほどに。

宮中に流れる空気から、薄々それを感じ取ったのであろうナナレイダの様子に、フィオルシエーナは微笑した。

心から、この身を気遣ってくれているのが伝わってくる……その思いが嬉しい。

「そうね……いずれ、そう遠くないうちに、わたくしは国内の有力貴族か、近隣の王家のどなたかに嫁ぐことになるのでしょうね。けれど、わたくしは、不安には思っていないのよ。本来なら十年前に消えていたはずの命なのですもの……生き延びた以上、きっとわたくしにはまだやらなければならないことが残されているのだと思うし……」

嵐の海で、乗っていた船が沈んだというのに、自分は助かった。

記憶こそ失ったけれど、そこには神の加護があったのだと信じている。ならば、やるべきことを果たすまで、この命が消えることはないのだ……きっと。

「そうですよね！　精霊たちの護りも篤い姫様ですもの、きっと幸せが約束されているに違いありません！」

女主人の幸福な未来を、信じて疑わない侍女の言葉に、フィオルシェーナはちくりと記憶を刺激された。

――……として、幸せな生を送っておくれ。わたしが望むのはそれだけだ、可愛い、愛しい、わたしの……。

それは遠い、遠い声だ――なのに、刹那、胸を鷲摑みにされるような痛みと切なさに襲われる。

（……また、あの声……）

記憶にはないその声は、過去からのものなのか、それとも未来からの誘いなのか。

いつか、知る日が来るだろうか。その日の到来を、望んでいるのかいないのかもわからないまま、フィオルシェーナはそっと目を伏せた。

長い銀の睫毛に、南の海を思わせる明るい青の瞳が隠されると、その白磁の肌も相まって、彼女は雪の化身のように見える。

「……まるで雪の姫君のよう……」

うっとりと呟くナナレイダの言葉は広がり、フィオルシェーナは新たな呼び名を得た。

氷のように冷たく鋭利な存在ではない、柔らかく、それでいて汚れなき純白の……。

雪姫、といつしか彼女は呼ばれるようになった。

2　運命の恋

フィオルシェーナがファーリッシュに帰還し、そろそろ二年が経ち、彼女が十六歳を迎えた頃、国王シトラーゼンは決断を迫られた格好で、数点の肖像画を彼女の部屋に持ち込んだ。

一目でその意味を悟ったフィオルシェーナは、国王に茶を振る舞いながら、笑顔で尋ねた。

「それで、わたくしはこの中のどなたを選べばいいのかしら？」

問われた国王は、苦虫を噛みつぶしたような顔になった。

「選びたくないのなら、選ぶ必要はない。国内の貴族でもなんでも、お前が心憎からず思っている相手がいるのであれば、こんな話はすぐにでも断ってやる」

だが、もし意中の人物がいないのであれば、この中から伴侶を選ぶのが望ましいということだ――ファーリッシュの王家の血族は、あまりにも少なくなってしまったのだから。

フィオルシェーナとしては、心に決めた相手もいない以上、誰でも構わないというのが本音だったが、それをシトラーゼンの前で口にするのは憚られた。

十年間の記憶を失った自分に対して、愛情と負い目を抱え込んだ兄同然のひとの心に、不用意な言葉で影を落とすような真似はできなかった。

だから、彼が許してくれる、『選ぶ』ことだけはやってみようと思ったのだ。

「心に決めた方などおりませんけれど……そうね、ナーナの話を聞いていると、時に運命的な出会いというものが、人生には用意されていることもあるという話だし。試してみるのもいいかもしれないわね」

簒奪者の勢力を一掃したとはいえ、ファーリッシュの国情はまだまだ不安定なままだ。王家を支えるだけの力を有する国内の大貴族か、力のある近隣諸国の支持及び協力が必要な状況は当分続くはずだった。

そして、それを取り付けるための絶好の切り札に、フィオルシェーナはなり得るのだ。

「見せていただけます、お従兄さま？」

シトラーゼンは王だ。

王である以上、肉親の情より優先しなければならないことがある。

国を守るためには、政略的な婚姻を血縁者に強いることさえなさねばならぬ務めの内だ。

それでも、想像していたより、遙かに少ない肖像画の枚数が、彼がいかに従妹――正確には再従妹だが――の縁談に、神経を使ったかを物語っている。

そうすることを……否、そうせざるを得ないことを、覚悟した上でこの部屋を訪れたはずのシトラーゼンは、それでも渋面のまま、従者に命じて、持ち込まれた肖像画に描かれた人物の『釣書』を説明させる。

従兄の心理的負担を減らすためだけに、従者の口上を聞いていたフィオルシェーナは、しかし三枚目の肖像画を目にした瞬間、はっと息を呑んだ。

描かれていたのは、黒髪の、精悍な顔立ちの青年だった。

瞳は北海に浮かぶ流氷を思わせる薄い青――。

どくん、と胸が激しく脈打った。

(わたくしは……この人のことを、知っている……?)

気のせいかもしれない――けれど、こんなにも心が揺さぶられたのは、ファーリッシュに戻って初めてのことだった。

フィオルシェーナは思わず胸元に手を当て、食い入るように、肖像画を見つめ、呟いた。

「この……方は……!?」

どなたなのですか――。

必死な顔で問いかけた彼女に、シトラーゼンもまた驚いたような顔をして――だがすぐに教えてくれた。

「それは先日、隣国アズアーダの国王に即位されたアフレイド陛下だ」

シトラーゼンの顔には、微かな逡巡の色があったが、結局彼はその理由を口にすることはなかった。

それから三カ月の後――。

ファーリッシュ王女フィオルシェーナと、アズアーダ国王アフレイドの婚約は大々的に発表された。

二年後の婚姻の日に向けて、止められない歯車が動き出したのだ。

◇　◇　◇

なにもかもが目まぐるしく進んでいく。

政略の意味合いの強い婚姻にあっては、そうしたことは珍しくないと、わかっているつもりで、本当の意味ではわかっていなかったことを、フィオルシェーナは知った。

「姫様、アフレイド陛下から、贈り物が届きましたわ。いつも通り、お手紙も添えてあって……本当に、お優しい御方ですわね。もっとも、これぐらいやっていただかなくては、大切な姫様の旦那様とは認めませんけど」

浮き浮きした様子で、ナナレイダが届けられた贈り物の包みを開くのを、フィオルシェーナは微笑んで見つめていた。

婚約が調って以来、月に一度は届けられる贈り物は、皆彼女に似合いそうな装身具や小物である。彼女の肖像画を見て、似合いそうなものを選んでくれているのがわかる。

そんな先方の態度に、保護者を自認しているシトラーゼンの心証も、最近では随分軟化してきているようだ。そのことに、フィオルシェーナ同様気づいているらしいナナレイダも笑う。

「うちの陛下のご機嫌も、最近は直ってきたみたいで、本当に喜ばしいことですよね。以前はお似合いだと、勝手なことをわたし言ってましたけど、ご婚約が決まってからの陛下のご様子を見ていますと、あれは大切な妹を取られる兄の心境に一番近いのだとわかりましたもの。わたしには兄はおりませんけれど、従兄が、妹の従姉の嫁ぎ先が決まったときとそっくりで、失礼ながら笑ってしまいました」

気さくな性格の侍女の言葉に、フィオルシェーナは曖昧な笑みで答える。

「お従兄さまは、わたくしを不憫に思って気遣ってくださっているのよ。きっと、アフレイドさまもそう……過分なまでにお気遣いいただいて、心苦しいぐらいだわ。御政務のほうも大変らしいし……」

この言葉に、ナナレイダは猛烈に反論した。

「まあ！　姫様に選ばれた御方なのですもの、これぐらいの誠意を示してもらうのは当然というものです！　言っては失礼ですが、アズアーダは国としての歴史も浅く、さしたる国土もない小国ではありませんか。誇れるものといったら、武力と馬ぐらい」

「けれど、そのアフレイド陛下の武力という後ろ盾のおかげで、この国が支えられているのは確かな事実よ。いくら歴史があろうと、守れるだけの力を持たない限り、国などたやすく瓦解してしまうことを、わたくしもお従兄さまも、いやというほど味わわされたわ」

そんな、すでに充分に世話になっている相手に、こんな気遣いまでさせてしまうのはどうかと思うのだ――と続けた彼女に、元気な侍女は「とんでもありません！」と答えた。

「それとこれとは、問題が全然違います！　姫様とアフレイド陛下は、神が定めた運命の恋人なのですから、遠慮するだなんて、却って失礼にあたりますよ！」

と。

「そんな……運命の恋人だなんて……」

初めてアフレイドの肖像画を目にしたときの、フィオルシェーナの反応を見て、シトラーゼンが「運命の相手なら仕方ない」と洩らした言葉は、いつの間にか宮中に広まっていた。

「けれど、アフレイド陛下のお姿を目になさった瞬間、運命を感じられたのでしょう？」

ナナレイダの問いに、困惑しながら、彼女はそっと息をつく。

「……それは。確かに懐かしいような、切ないような、何と言っていいのかわからない思いが胸に広がったのは本当だけれど……」

「一度もお会いしたことのない方なのに、懐かしく感じるだなんて、それが運命でなくてなんだとおっしゃるんですか。間違いなく、アフレイド陛下と姫様は、運命の糸で繋がっておいでです。いまの姫様は、話があまりに早く進みすぎて、戸惑っていらっしゃるだけです。だって、姫様、アフレイド陛下からのお手紙を読む時、本当に嬉しそうでらっしゃいますよ？　もちろん、お返事の手紙を認められる時も」

そのことには気づいていなかったので、フィオルシェーナを目を瞠って「そうなの？」と問い返してしまった。

「そうですとも」

と即答されて、彼女は自分の戸惑いは、やはり気のせいなのかと思った。

アフレイドの肖像画を初めて目にした瞬間のあの衝撃も、彼からの手紙に綴られた文字を目で追う度に感じる懐かしさも――本当に神々が定めた運命ゆえの絆なのだとしたら、こんな風に気を回すのは間違いなのかもしれない。

どちらにせよ、動き始めたこの運命は、もう止められないのだから。

アズアーダに嫁ぎ、王妃として一生を送るのだ。

皆が信じるように、これが世界創世を為した七虹神と、百八の御柱と呼ばれる柱神の定めし運命であるのなら、自分はきっと意義のある人生を送ることができるのに違いない。

だから、胸の奥で疼く、小さな棘のような違和感は、忘れたほうがいいのだ。

きっと、そのほうがいいのだと、フィオルシェーナは自身に言い聞かせた。

3　途切れた緒の行方

フィオルシェーナが十八となると同時に、彼女はアズアーダへと旅立った。

一国の王女の輿入れとして、恥ずかしくないだけの支度を調えてくれたシトラーゼンの思いを噛みしめながら、彼女は嫁ぎ先であるアズアーダを目指す。

途中、国境において、警備の兵士はアズアーダから派遣された者たちに代わり、侍女の半数も入れ替わることになったが、一番気心が知れているナナレイダがそばにいてくれたことで、彼女はなんら不安を感じることはなかった。

唯一、気にかかることがあるとすれば、それはアズアーダ側の警備の責任者と名乗った青年の視線だったが、王妃となる女性に対し、思わず検分するような視線を向けるのは、当然と言えば当然のことだと思えたから、彼女は気づかぬ風を装った。

もっとも、ナナレイダはそうではなかったけれど。

古来のしきたりに則り、しつらえられた広い輿のなかで、ナナレイダは憤懣やるかたないと

いった様子で口を尖らせる。

「言いたくはありませんけれど、あの警備隊長でらっしゃるカストライドとおっしゃる方の姫様をご覧になる目！　気に入りませんわ！」

それは、フィオルシェーナ自身、気になっていたことだった。

カストライドは、肖像画でしか知らないアフレイドより、二、三、年長らしい、精悍な顔立ちの武人だったが、国境で初めて顔を合わせて以来、思わず苦手意識を抱かずにはいられないような目を向けてきた人物だった。

思い出す。

「カストライド・クラスタ・テュランと申します」

ファーリッシュとアズアーダの国境において、警備の責任者である彼の挨拶を受けた瞬間、フィオルシェーナは得体の知れない不安を感じた。

理由は、彼の自分に向ける、執拗なまでの視線だった。

値踏みするような視線には、慣れていたつもりのフィオルシェーナだったが、彼の視線にはなにか、それとはまた別の意味が含まれているように思えてしまったのだ。

突き刺すようでありながら、そこには絡みつくようなものも感じ取れた。彼女の一挙手一投足までも、見逃すまいとするかのようなそれを感じる度、フィオルシェーナは言葉にできぬ不

安を覚えずにはいられなかった。

彼が何かするわけでも、何か言うわけでもなかった。

だが、その眼差しはどこまでも強く、彼女を追いかけてくる。

そこに宿る感情が読み取れないから、フィオルシェーナはいつまでも、それに慣れることができずにいた。

感じるのは苛立ち……いや、不安だろうか？

自分でも判然としない、だが無視できぬ感情の波を、ナナレイダは敏感に感じ取り、しかし彼女の理解できる範疇で、思いを形にしたのだろう。

とはいえ、だ。

アズアーダに入って間もないこの時期、この国でも信頼厚いと思われる人物のことを悪し様に言うナナレイダの態度は、反感を招きかねない。

やんわりと彼女を窘めようとフィオルシェーナが口を開きかけたときのことだった。

国境で合流した、アズアーダ側の年配の侍女が笑いながら告げた。

「お許しくださいましな、殿下。カストライドさまは、御従兄ながら、陛下のことを実の弟のように愛おしんでいらした方なのです。王妃となられる方は、ご自分の眼鏡にかなう女性でなければと、常々おっしゃられていたほどで。ところが、陛下ときたら、殿下の肖像画を目にな



さった途端、カストライドさまに相談もなく、求婚なさると決められたのですわ。兄代わりを自認していらしたカストライドさまはとしては、殿下の資質を見極めようと必死なのでしょう……言い方は悪うございますが、可愛い弟を取られる兄の心境とでも申しましょうか」

似たような事例を思い出したのか、ナナレイダが難しい顔で応じた。

「妹君を思う兄心というのなら、納得できる気はしますけど」

それが、誰のことを指しているのか、すぐに悟ったのだろう、他の侍女まで笑い出した。

「確かに、殿下ほどお美しい方が妹でしたら、兄君代わりのシトラーゼン二世陛下も、心安らかではなかったことでしょうね。けれど、ご安心くださいな、カストライドさまは、常々陛下の妻となる御方は三国一の美女でなければならないと口になさっておいでしたけれど、その件に関しましては、殿下とお会いになられてより、ぴたりと口を閉ざされたと聞き及んでおりますから。元より殿下の聡明さ、お優しさはアズアーダ国内に広まっておりますし、その上、これほどにお美しい御方だなんて、民もきっと歓喜して殿下をお迎えいたしますわ」

優しさ、聡明さ云々は、シトラーゼンが事前の根回しとして噂を流していたのだろう。

アズアーダ側の侍女たちと、思いがけぬ話題でうち解けることとなったナナレイダは、ようやく安堵した様子だった。

そこで初めて、自分の発言が不用意だったことに気づいてか、慌てて謝ったわけだが、年配

の顔ぶれの多い、アズアーダ側の侍女たちは、気にする様子もなく許してくれた。
フィオルシェーナ自身、一連の会話の内容に、安堵を覚えていた。
（そう……カストライドさまはアフレイド陛下の兄君代わりの方で、だからわたくしにあんな厳しい眼差しを向けてらしたのね……）
すとんと、胸に落ち着く答えだったにも拘わらず、フィオルシェーナはなぜか得心がいかないものを感じた。
もっと違うなにかが、あの眼差しには含まれているように思えてならなかったのだ。
けれど、彼女はそれ以上のことを考える気になれなかった。思惟の糸を辿った結果、その先に見えるかもしれない答えを、知りたくないと思ったのだ。
後に、彼女はこの時の自分の決断を深く悔いることになる。
それは、あまりにも遅すぎたのだけれど――。

◈　◈　◈

婚礼の席で、初めて相対したアフレイドは、肖像画で見たとおり、強い覇気と、同じだけ大きな優しさを瞳に秘めた青年だった。

じわりと、胸が熱くなる。

（ああ、皆が言うとおり、わたくしはこの方と連れ添うために生まれてきたのだわ）

フィオルシェーナは素直に、そう信じることができた。

優しい光をたたえた瞳――艶やかな漆黒の髪。なにもかもが懐かしく、愛しい。

現世で出会ったことはなくとも、きっとこのひととは以前違う生を享けていたときに出会っていたに違いない。

そうでなければ、この懐かしさを説明できない。涙が出るほどの愛しさの理由を思いつくことができない。

（愛しいひと）

と、心から思った。

生涯を愛と絆で結ばれる、唯一無二のひとは、このひとだったのだと。

（このひとと、生きていこう……）

心の奥底に蟠って消えない、違和感などは捨ててしまおう。

そうして、この祝福された人生を――。

夫となったアフレイドから、愛情に満ちた口づけを受けながら、彼女がそう心に誓って間もなく――。

悲劇は、起こった。

「陛下！」

「妃殿下！」

「姫様っっっ！」

いくつもの悲鳴が、耳に届いたけれど、フィオルシェーナはなにが起こったのかわからなかった。

視界を覆い尽くすのは深紅――ただ、深紅一色。

生涯を誓い合ったばかりの青年が、苦しげに血泡を吐きながら、彼女の目の前で倒れたのは、まさにその瞬間だった――。

◈　◈　◈

声すら、上げられない。

ただ呆然と立ちつくすフィオルシェーナの体を強引に抱き寄せたのは、アフレイドを刺した剣を手にしたままの、カストライドだった。

「聞け、皆の者！」

戦時にあっては、兵を従える力と魅力に溢れた声が、その場を支配する。

「アズアーダはそもそも尚武の国！　最も強き力を持つ者が王として立ち、国土と民を守ってきたはず！　にも拘わらず、このアズアーダにおける王位継承のありようはどういうことだ！　近隣の王家に倣うことばかりを覚え、真に強き王を輩出することを放棄したとしか思えぬこのやり方は!?」

式典の警備のために配されていたと思しき兵士たちの間から、「そうだ！」「その通りだ！」という声が上がる。

カストライドは、この日のために、部下たる兵士たちに根回しをしていたのだ。

絶望とともに、フィオルシェーナはその事実を悟った。

カストライドの言葉は、なおも続く。

「王とはまず、強くあらねばならぬはず！　しかるに、この目の前に倒れる無様な男のありようはどうだ!?　これが王か!?　王と呼べるのか!?」

「否！」

「否！」

「王にあらず！」

興奮した兵士たちの間から、熱に浮かされたとしか思えない声が上がる。

抱き寄せられた男の唇から洩れる熱い吐息が、肌を撫でる感触に、ぞっとするものを感じながら、フィオルシェーナはその顔を見上げ、恐怖を覚えた。

弟のように思っていたはずの王を殺したばかりの男の目には、獲物を前にした肉食獣のような光が宿っていた。

本能的に直感した――カストライドが、いまこの時を狙って事を起こしたのは、自分に対する欲望もまた、理由に含まれていたからであろうと。

王亡き時、その血を受け継ぐ子供が誕生していない場合に限り、王妃たる女性には、第一位王位継承権が認められるという、アズアーダ特有の法を利用して、カストライドはフィオルシェーナごと王位を手に入れるつもりなのだ！

「いま、脆弱なる王は倒れた！　王に最も相応しき者は!?」

「カストライドさま！」

「カストライドさまのほかに王たる方はおらず！」

「カストライドさま！」

「カストライドさま！」

兵士たちの熱狂的な歓呼が続く中、抱き寄せたままのフィオルシェーナの耳元で、カストライドがささやいた。

「そなたを目にしなければ、これほど事を急ぐつもりはなかった……純白の雪姫よ。もっと時間をかけて、周到にやり遂げるつもりだったのだ。だが、そなたはファーリッシュの姫にして、アズアーダの王妃と定められし者……そなたを手に入れるために、わたしは王とならねばならなかったのだ」

残酷すぎる事実を耳にして、フィオルシェーナは目の前が真っ暗になった。

自分の存在が元凶となったのか。そのせいで、一国の運命が狂わされたというのか。ならばいっそ、この身を滅ぼしてしまいたい、とまで思った――。

だが、もう自分のものだとでも言いたげに、抱き寄せるカストライドへの嫌悪感と、顔を背けた拍子に目に入ってきた、命を絶たれたアフレイドの虚ろな目に気づいた瞬間、強烈な衝動が彼女を支配した。

愛しいと思ったひとの死――そのひとの命を奪った男に触れられる、どうにも我慢できない嫌悪。

気づけば、彼女は叫んでいた。

「いやあぁっ！」

その瞬間、目を灼かんばかりの光槍が、カストライドの体を貫いた。

そのあまりの衝撃に、意識を失いかけたフィオルシェーナは、懐かしくも愛しい腕が、自分

の体を支えてくれたことを知った。
奔流の如く、記憶が甦る。
彼女は涙を流しながら、夫にと選びながら、目の前で失うこととなってしまった青年に謝ることしかできなかった。
（ごめんなさい……ごめんなさい、アフレイド……）
自分が恋した相手が、彼によく似た、けれど彼ではないひとだったことを思い出してしまったからこそ。
物心ついて間もない……幼かったあの日――。
フィオルシェーナの運命の恋は生まれていたのだ。

4　秘された筐

フィオルシェーナが覚えている最初の記憶は、暗く冷たいものだった。
嵐の海の中、彼女は必死に木ぎれにしがみついていた。
乗っていた船に雷が落ちたのだ。炎に包まれる船上は混乱を来し、彼女は自分が誰によって小舟に乗せられたのかもわからなかった。
けれど、その小舟も、無事にはすまなかった。
船が沈む際に生じた大渦に、巻き込まれてしまったのだ——幼い彼女を、大人の誰かが渦とは逆の方向へ放り出した。
「……さまっっ！　どうか、神の御加護を……っっ！」
知っている声のような気もしたが、誰のものかは思い出せない。
彼女にとって幸いだったのは、そのとき身につけていたものが、以前とは異なり布地の少ない服であったことと、すぐそばに、彼女が摑まっても沈まないぐらいの木ぎれが浮いていたこ

とだった。

夢中でそれにしがみついたフィオルシェーナは、船と人々を乗せたままの小舟が海に沈んでいく様を見つめていることしかできなかった。

（なぜ）

と思った――どうして、と。

ここ数カ月、様子がおかしいことはわかっていた。

周囲の大人たちが、険しい顔で彼女を寝台から連れ出したのは、まだ夜が明けきれない夜中だったし、「隠れ鬼ですよ」と言って、着せられたのは、それまで見たことのないような粗末な服だった。

見つからないようにという理由で、母がいつも褒めてくれる髪を切られた時は泣きそうになったが、周囲の緊張した空気のせいで、なにも言えなかった。

狭い馬車に押し込められ、ようやく窮屈な状態から解放されたと思ったら、今度は見るからに小汚い船に乗せられ、しかも船室から出ることを禁じられた。

酷いと思った。皆がなぜ、こんなことをするのかわからなかった。わからないからこそ、尚更腹が立った。

（こんなことする、みんなは嫌い。神様の罰が当たればいいんだわ）

とさえ思った——だが。

心底から、そんなことを望んだわけではなかったのだ。こんな酷い罰を与えてほしいだなんて思っていなかった。

「神様！　神様！　神様！　お願いです、お願い……っ！　みんなを助けて……！」

声の限り、フィオルシェーナは叫んだ。

降り続く雨は痛いほどに顔を打ち、木ぎれに摑まっているだけで必死な身体から、どんどん熱を奪い取っていく。

「神様！」

それは、何度目——いや、何十度目、何百度目の叫びだったのか。

声を張り上げることで、体力の消耗を早めた幼い少女は、ついに力尽きた。木ぎれに摑まっていられない……指にも腕にも力が入らず、重くなる一方の身体は海の底へと誘われているようにしか思えなかった。

「神……さ……ま……」

最早、叫びにもならない言葉を残し、フィオルシェーナが海に呑み込まれようとした、まさにその刹那——。

そのひとは、現れた。

意識を失う寸前だというのに、なぜかフィオルシェーナは、そのひとの姿をはっきり見ることができた――そのひとが、本当に特別な、奇跡の化身だったからかもしれない。

「……雷精が騒いでいると聞いて駆けつけたが……どうやら遅かったか」

荒れ狂う波のせいで、全身濡れそぼったフィオルシェーナの体を軽々と抱き上げた後、渦すら消えた海面を見やり、そう呟いたそのひとの声には無念の響きが宿っていた。

ぐったりと身を任すしかないフィオルシェーナの目に、そのひとの顔が映ったのは偶然だった。だが、その姿はなにより鮮烈に、彼女の心に焼き付いた。

そのひとの髪は、真っ直ぐな……青味を帯びた黒。雷光を受けて輝く瞳は深く澄んだ紫だった。

（神様だわ）

と、フィオルシェーナは信じた。

なぜなら、この嵐のなかで、そのひとは全く濡れていなかったし、彼女が神話でしか知らなかった存在のものに騎乗していたからだ。

荒ぶる海を駆け抜けるという海馬――人間の身では触れるどころか近づくことすらかなわぬ幻獣を従えるこのひとが、神以外の何ものだというのか。

（神様が来てくださった……大丈夫。もう、きっと、大丈夫……）

安堵すると同時に、フィオルシェーナは意識を手放した。

◈　◈　◈

神だと信じたそのひとが、本当に世界の天と地の狭間である『空』を支える存在なのだとフィオルシェーナが知ったのは、目覚めてすぐのことだった。

濃厚な神気に満ちた屋敷の一室で、意識を取り戻した彼女の目に、これまで存在を感じ取ることはあっても見たことはなかった精霊たちの姿が映り、しかもその声が聞こえたからだった。

――まあ、目を醒ましたわ。

――早く一位さまにお知らせしなければ。

――ああ、でもなんて可愛らしい子！　この子とも話せたら、きっと楽しいでしょうに。

――無理を言うものではないわ。いくらこの屋敷が一位さまの神気で満たされているとはいっても、資質のない人の子には、わたしたちの気配を感じ取ることさえできないのだから。

――あら、でも一位さまが人の子をここに連れて来られたのは初めてよ？　この子には資質があると思われたからではないの？

——ああ、そのことなら……。

なにか言いかけた精霊のひとりが、フィオルシェーナの視線に気づいたのか、口を噤んだ。

——まあ、この子、わたしたちが視えているようだわ。

意外そうな顔で、そんなことを言うと、その精霊は確かめるように、彼女に声をかけてきた。

——あなた、わたしたちのことが視えているの？　もしそうなら……ああ、駄目だわ。視えていたとしても、声が聴こえなければ、確かめることはできないわね。わたしたちは人間のように唇を動かして意思の疎通を図るわけではないから……やはり、一位さまをお呼びしたほうがいいわ。

言われて初めて気づいたことだが、確かに彼女たちの口は動いていなかった。

驚くと同時に、気になっていたことを、フィオルシェーナは恐る恐る尋ねてみた。

「一位さまって、あの神様のこと？　ここは神様のお屋敷なの？」

ぐるりを取り囲んでいた精霊たちが、どよめいた。

——この子、聴こえているわ！

——やはり、視えているのよ！

——なんて、素敵！　しかも女の子だし！

――綺麗な銀髪だわ、まるで月光を紡いだかのよう……。きっと花が似合うわ。瞳と同じ明るい青い花がいいかしら？　淡く色づいた花も似合いそうね。芙蓉なんかどうかしら？　ああ、でも、短いのはいただけないわね……伸ばさせましょう。髪を美しくする椿の種なら、いくらでもあることだし。

――薔薇水も作ってあげましょう。確か、人の子の肌にはいいはずよ。

――ならば、わたしは着る服を作ってあげたいわ。人の子の服は、場所によって本当にいろいろな種類があるから、きっと楽しいわ。

――いい考えね！　でも、それなら蚕を集めて来なくては。勝手に他所から持ってくることは、一位さまに禁じられているのですもの。

何とも喧しいことだった。

精霊とは、もっと神聖な雰囲気を纏っているものだと信じていただけに、フィオルシェーナは驚きを禁じ得なかった。

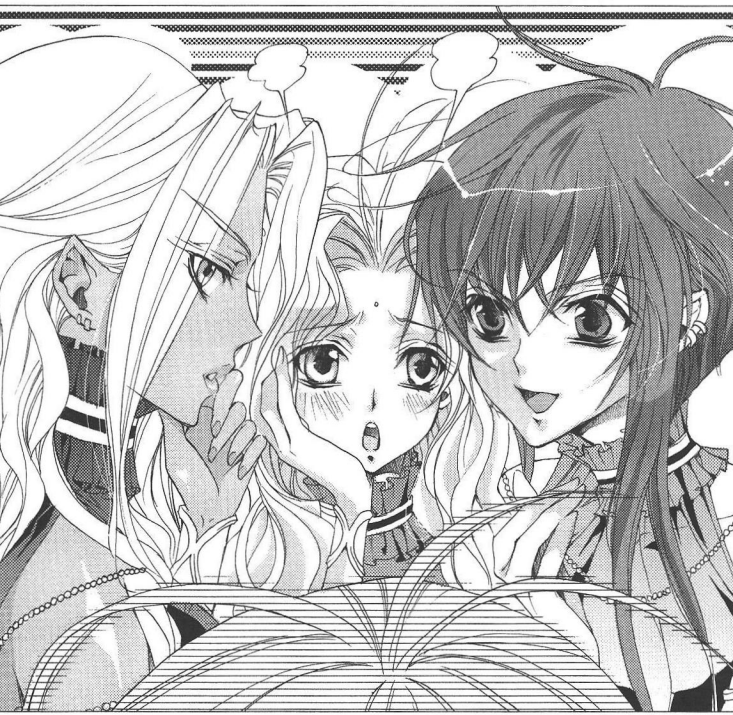
だが、このままでは、問いの答えをもらえそうにないことだけははっきりと感じたため、意を決して口を挟むことにする。

「あの……だから、その一位さまって……？」

彼女の問いは、今度は精霊たちに届いたようだった。

――一位さまは一位さまよ。紫属第一の御方。
――世界の空を支える柱神さま。
――そう、ここはその一位さまの住まわれるお屋敷。
――これからあなたが暮らすお屋敷。
「第一位って、あの神様は柱神さまの王様なの？」
世界に百八人ある柱神に、優劣があるとは思いもよらなかったフィオルシェーナが、目を丸くして尋ねると、精霊たちはさも可笑しそうに笑い、さざめいた。
――人間の子は、なんて突飛なことを思いつくのかしら
――笑ってはいけないわ。この子は人間の子のなかでも、とりわけ幼いのですもの。きちんと教えてあげなければ。
――そうね、そうよね。教えるというのも楽しいわ。
――いい、人間の子供。柱神に優劣なんてないの。一位さまとは、紫属の御柱の中で、最も長く生き、経験を積まれた御方のことなの。二番目に長く生きてらっしゃる御方は二位さまで、もちろん他の属性の御柱の方々にも一位さま、二位さまはいらっしゃるわ。
――けれど、わたしたちの一位さまほど長く生きていらっしゃる一位さまはおられないけれどね。

——わたしたちの一位さまほどお美しい御方もね。
——お優しい御方も。
——聡明な御方も。
精霊たちが、口々に褒め称えるのを聞きながら、何となくだがフィオルシェーナは理解した。
自分を助けてくれたあの神様が、紫属の柱神ばかりでなく、全柱神中最も長く生きている存在であること、また精霊たちにこの上なく慕われていることを。
「とても立派で、素晴らしい御方なのね？」
彼女の確認するような問いかけに、精霊たちが嬉しそうにうなずいた。
——そうなの！
——そうなのよ！
（やはり、あのひとは神様で、しかも神様のなかでも特別な方だったんだわ）
それが、誇らしく、嬉しかった。
幼い彼女には、精霊たちの言葉の持つ、もうひとつの意味を汲み取ることなどできなかった。
ただただ、彼に命を救われたことを感謝するだけだった——その意味を知る、瞬間まで。



◈　◈　◈

嵐の海にさらされたせいで、熱を出したフィオルシェーナは数日の間、寝台に縛りつけられることとなった。

縛りつけたのは、風霊たちで、彼らは彼女が寝台から起き上がろうとする度に、体の熱を奪うことのない、けれど強い風で以て、その動きを封じようとするものだから、正直閉口した。

お手洗いさえ、一々断らなければならなかったのだ。

口にできるものといえば、彼らがどこからか持ってくる蜜と清水――。

しかし、弱り切った体には、それがよかったのかもしれない。フィオルシェーナは三日後には、精霊たちに咎められることなく、庭に出ることができるぐらいには快復した。

多少ふらつく足取りで、屋敷の外に出たフィオルシェーナは、そこで目にした光景に、思わず息を呑んだ。

それは――そこは、この世とは思えぬほどの美に満ちた空間だった。

これまで見たことがない花々が咲き誇っていたわけではない。

庭師によって、完璧に樹木や草花が配置されているわけでもない。

それどころか、フィオルシェーナの知る庭師なら、舌打ちしながら土から引き抜くに違いない野草がそこかしこに見受けられた。

確か、春女苑といったはずだ。

その隣では麗春花が儚くも美しい花弁を揺らし、かと思えば少し離れた場所では金魚草や日輪草が咲き、さらには桔梗や葛の花、山茶花まで咲いている。

でたらめもいいところだった。

花好きな母の影響で、フィオルシェーナには、これらの花が決して同時期には咲かないことを知っていた。

狂い咲きという言葉も知っていたが、果たしてどれをそう指していいのか、判断できなかった——四季すべての花々が咲き誇っているこの庭にあっては。

だが、一番おかしいのは、自分の感覚なのかもしれない、とフィオルシェーナは微かな不安を覚えた。

季節を無視した花々が咲き誇るその庭は、本来なら違和感を覚えると同時に、気味の悪さを覚えてもおかしくないはずのものだった。

現に、フィオルシェーナは、母が庭師に命じて、冬に柑子の花を咲かせた時は、大好きな香りだったにも拘わらず、それを楽しむことができなかった。

以前の自分は、季節を無視した……否、侵した行為によって生じた現象には、生理的な嫌悪を覚えずにはいられなかったのだ。

なのに、このでたらめな庭を目にして、覚えるのは嫌悪ではなく、胸の奥から熱くなるような……感動なのだ。

（なぜ……？）

首を傾げた彼女は、不意に気づいた。

ここにあっては、全ての季節の花が揃って咲いていても、不自然ではないということに。

ここは神の庭——人間の手によって歪められた自然ではないのだ。

ほっと息をつくとともに、彼女は美しい花々を心から堪能した。人間の世界ではあり得ない花園を見ていると、それだけで心が温かくなるような気がした。

なのに——なぜか、涙がこぼれた。

自分でも理由がわからない涙に、呆然としていた時、声がかけられた。

「どうしたのだ？」

耳にするだけで、心が幸福に包まれる、甘く優しい——どこかで聞いたことのあるそれに振り返ったフィオルシェーナは、人間ではあり得ない美しいひとを認めた。

くせのない真っ直ぐな黒髪が、光の加減で青い輝きを放っている。

雪花石膏のように白い肌は、けれど決して病的には見えない。
通った鼻梁、優しい笑みをたたえた唇――なにより印象的なのは、長い睫毛に縁取られた瞼の奥に輝く、紫水晶の瞳。
（ああ、神様……）
目にした瞬間、胸が締めつけられるような思いがフィオルシェーナの心を支配した。
自分を救ってくれた神を前にし、彼女は声もなく、ただただ彼を見つめることしかできなかった……。

◇　◇　◇

思えば、この時、彼女の恋の種子は生まれていたのだ――。

5　美しき日々

俗世から切り離された、柱神の屋敷の敷地内にある香草園――籠を手に訪れたフィオルシェーナに、大地の精霊たる地霊たちが、口々に話しかけてくる。

――今日は、なにが欲しいの、人間の子供？

――眠れないのなら、果樹園の橘の実の皮の香りを嗅げばいいわ。

――風邪気味なのなら、エルダーの花で淹れたお茶を。

――薔薇の実のお茶もいいわよ。

苦笑まじりに、彼女は答える。

「お気遣い、ありがとう。でも欲しいのは、わたしのではなく、リアンのための香草なの。最近、何だか難しい顔で考えこんでいることが多いから、気分が落ち着くカミツレの花が欲しくて。それと、あなたたち精霊の流儀はわかっているつもりだけど、わたしは『人間の子供』なんて名前じゃないわ。きちんと……というのが無理でも、せめて愛称ぐらいは呼んでちょうだ

い」

リアンことリアンリードという名の柱神に命を救われ、その屋敷で暮らすようになって、そろそろ七年になるのだが、未だに閉口させられるのは、精霊たちが、なかなか愛称ですら名を呼んでくれないことだった。

養い親であるリアンリードから、精霊にとって名前というものは非常に重要な意味を持つものであり、軽々しく口にすべきでないと彼らが考えていること、彼らが彼女の名を呼ばないのは、決して彼女を軽んじているわけではなく、逆にその意志を尊重しているからだということを、懇切丁寧に説明してもらったおかげで理解はしたものの、だからと言って、『人間の子供』としか呼ばれないのはどうしても我慢できなかった。

だから、妥協案として、愛称を呼ぶように頼んだのだけれど、精霊の中でも最も頑固な気質の地霊は、未だになかなかそれさえ口にしてくれないのだ。

しかし、今回に限っては、地霊の親愛も一身に集めている屋敷の主に関わることとして、彼らも直ちに節を折り、心配そうに問いかけてきた。

――まあ、一位さまが？

――いったいどんなご様子なの、フィオ？

――風霊たちときたら、一位さまのご命令だからと言って、最近、なにも教えてくれないの

よ。いつもは聞きもしないことまで話して行くくせに。

それは、この屋敷で暮らすようになって、フィオルシェーナもすぐに気づいたことだった。

精霊は、その属性によって気質がかなり異なるのだ。

最もお喋りで気分屋なのは風霊、気性が激しいのは火霊、普段は穏やかだが何かのきっかけで激しさを見せる水霊、とことん頑固で融通が利かない地霊。

フィオルシェーナがリアンリードに助けられ、屋敷に連れて来られた時、真っ先に会ったのは風霊たちだった。そのこともあって、最も親しくもなったわけだが、確かにここ最近、お喋り好きの彼らの態度がぎこちないとは思っていた。

ただ、自分には「一位さまのご命令だから」とは言っていなかったから、今まで原因がわからずにいたのだ。

「……ごめんなさい。そういうことなら、原因は多分わたしだと思うわ」

落ち込んで答える彼女に、地霊たちが「どういうことなの？」と問いかけてきた——責める響きがないのは、彼らの優しさだ。

「リアンはわたしを引き取ってくれてからもずっと、わたしがどこの誰なのか、調べようとしてくれていたでしょう？　わたしは名前しか覚えていなかったし、乗っていたという船の記録を調べても、記載されていた住所も名前すら嘘だったという話だし……」

そのことを教えてくれたのは、風霊のひとりだった。

聞いた時には、そこにどんな意味があるのか、理解することはできなかったが、成長するにつれ、わかることは増えていった。

乗船記録に記載されている内容が虚偽のものであったということは、自分や両親が当時公にできない立場にあったことを意味するのではないだろうか。

自分は……もしかしたら、罪人、もしくはその係累にあたるものとして追われていたのではないだろうか。

その事実が確認され、今、大好きなリアンに届けられたのではないだろうか。彼が難しい顔をしているのはそのせいでは……？

あり得そうなことに思えてしまい、だからこそ恐ろしくて確認することができない。

「わたし……ここが大好きだわ。リアンとみんなと……いつまでも一緒に暮らしていきたい。でも、もしわたしのせいで、リアンの立場に傷をつけるようなことになってしまったら……とても耐えられない」

思わず泣きそうになったが、フィオルシェーナは必死に堪えた。

そうなったら、優しい精霊たちが、こぞって「そんなことはない」と慰めてくれるのがわかっていたからだ。

（泣いては駄目）

鼻の奥が、つんと痛くなるのを感じながら、懸命ににじみそうになる涙をとめようと、全身に力を込めた時のことだった――ここ最近、すっかりご無沙汰だった風霊たちの浮かれた声が聞こえてきたのは。

――夏の一位さまだ！

――夏の一位さまがおいでになった！

――ああ、よかった。きっとこれで、我らが一位さまの憂いも晴れるに違いない！

風霊たちの言葉に、フィオルシェーナははっと息を呑んだ。

リアンリードを慕う精霊たちが、『一位さま』と呼ぶのは彼ひとり。だが、彼の親しい友人に対しては『〇〇属の〇位さま』、もしくは『春（あるいは夏、秋）の〇位さま』と敬意をこめて呼ぶことを、彼女はこの七年で学習していた。

そして、彼らが呼んだ『夏の一位さま』とは、夏と称される季節属性を持つ緑、緋、蒼の柱神中、最年長にして、リアンリードに次ぐ生を紡いでいる、蒼属柱神の第一位――エン・リュウでしかあり得ない。

「……大変だわ。お茶を用意しないと……」

ふらりとその場に立ち上がり、フィオルシェーナは屋敷へと戻り始めた。

この時、彼女は十二歳——人間にあまり馴染みのない精霊たちには気づけなかったが、その飛び抜けた聡明さは、到底同じ年頃の他の子供の比ではなかった。

だが、同時に聡明過ぎる彼女は、自身の身元について、最悪の事態を想定していた。

不安を抑えきれないまま、彼女はそっと目を伏せた。

（どうか、ここにいられますように……けれど、もしわたしの存在が、リアンに迷惑をかけるような罪深いものであったなら……）

その時は——その時、一体どうしたらいいのか。

フィオルシェーナにはわからなかった——。

◈　◈　◈

リアンリードには摘んだばかりのカミツレのお茶を、エン・リュウには彼が以前持参した南方のお茶を淹れて、フィオルシェーナはふたりのいる部屋へと運んだ。

養い親の眷族である柱神のなかには、フィオルシェーナのことを好ましく思わない者たちもいるのだが、エン・リュウは初めて出会った時から好意的で、お茶を淹れることを覚えて以来、彼女のお茶を望んでくれるのだ。

（風霊たちが喜んでいたんだから、きっと悪い知らせではないはずだわ）

自分に言い聞かせながら、彼女は扉を小さく叩いた。

「失礼します」

と断って、室内に入った途端、両手から茶の載った盆ごと取り上げられた。

風霊の仕業だ。

そして、盆が彼女の手を離れると同時に、エン・リュウのたくましい両腕が、彼女の体を軽々と抱き上げた。

「エ、エン・リュウさま……？」

突然のことに、驚きの声を上げたフィオルシェーナに、人間なら三十代半ばに見える蒼の柱神は楽しそうに告げた。

「おう、フィオ、久しぶりだな！　喜べ、お前の身元がわかったぞ！」

言われた言葉がすぐには理解できず、彼女は思わず部屋の奥にいる養い親に目を向けた。

本当なの――と、目で問いかけると、リアンリードが深くうなずいた。

そんな、声なきやりとりに気づいたのだろう、エン・リュウはフィオルシェーナと目線が合う高さまでその体を下ろし、悪戯っぽく笑った。

「なんだ、なんだ？　フィオはわたしの言葉が信じられないのか？」



問いかけてくる声には、少しばかり拗ねた響きが宿っていた。

「い、いえ、そんなことは……」

慌てて否定したが、エン・リュウは全てお見通しだと言わんばかりの目で見つめてきた。

エン・リュウの瞳――それは、リアンリードのそれも同じだが――は、神の瞳だ。

かつて人間として生まれ持っていた瞳の色ではなく、属性である色彩に染まっている。強い神性を宿すその瞳は、同じ色であろうとも、人間とは次元を異にする力と輝きに満ちている。

そんな目で見つめられては、人間に過ぎないフィオルシェーナに抗うことは不可能だ。

「……すみません。突然のことで、信じられなくて……。それに……いえ、なんでもありません」

自らの抱えこんでいる不安まで、口に出しそうになったのを必死に堪えて、小さな声でエン・リュウに頼んだ。

「それで……その、エン・リュウさま、降ろしていただきたいのですが」

堅苦しい態度を取られるのは嫌いだと言う、少々風変わりな柱神に限定しての、少しばかり砕けた口調で頼みこむと、褐色の髪と象牙色の肌を持つ柱神は、笑いながら彼女の願いを聞き入れてくれた。

乗っていた船が沈み、海に投げ出されて死にかけた経験のせいか、床に足が着いていないと

どうにも落ち着かなくなってしまったフィオルシェーナは、ほっと息をつくと同時に、もう一度エン・リュウの背後にいるリアンリードに目を向けた。

視線に気づいたらしい養い親が、微笑みながら、こくりとうなずくのを見て、ようやく安心する。

ここしばらくというもの、リアンリードを包みこんでいた、重苦しい空気が消えていたのだ。

（ああ、なら、わたしが罪人で、そのせいでリアンに迷惑をかけるという心配はせずにすむということなのだわ）

そのことが、一番の気がかりだったから、彼女は心の底から安堵した。

もっとも、それはエン・リュウの次の言葉を聞くまでの、束の間のものでしかなかったのだが――。

「可愛いフィオ！　お前はファーリッシュの王家に連なる姫君だったんだよ！　一時期、王位簒奪を目論む輩の勢力に押され、王家の者は皆国を逃れたが、僭王の支配に不満を抱く民の支援を受けて、王子のひとりが力をつけつつあるらしい。情勢は未だ不透明だが、もしその王子が国を取り返すことができれば、お前は晴れて、王族の姫として祖国に戻ることができるぞ。よかったな、フィオ！」

◈　◈　◈

ずっと、ずっと、ずっと――願っていたのは、ただひとつのこと。
リアンリードのそばにいたい。
そばにいても迷惑でない身でありたい。
それだけだった。
なのに、なぜこんなことになってしまったのか。
王家縁(ゆかり)の姫君だなど……そんなことは望んでもいなかったというのに。
(……ここに、いられない……?)
故郷に戻り、親族である人たちと会えることより、この屋敷を去らねばならないかもしれないことのほうが、フィオルシェーナにとっては重要だった。
だから、上機嫌なエン・リュウを見送った後、彼女はリアンリードに詰(つ)め寄ったのだ。
「本当なの!?」
と――。
たとえ本当のことであっても、否定してほしいと願い尋(たず)ねた彼女に、しかし世界を支える重

責を担う、神たる養い親は気休めを口にしてはくれなかった。

「本当だ。ファーリッシュの玉座を狙う簒奪者とそれに従う勢力は、七年前、一時的とはいえ、王都を占拠し、王を名乗ったという話だ。当時の王は討たれたが、王家に縁のある者たちは身分を隠し、名を変えて、再起の時を待つために都を離れたという……記録を洗っても、お前の身元がわからなかったのはそのせいだ。すまなかった。わたしがもう少し、世俗のことに長けていたら、お前に要らぬ不安を抱かせることもなかったというのに」

優しい、優しい養い親は、けれどフィオルシェーナの気持ちを、少しもわかってくれてはいなかった。

いや、フィオルシェーナ自身、この時初めて、自らの想いに気づいたのだ。

「そんなこと、謝って欲しいわけじゃない！」

叫ぶ自分のみっともなさを、わかっていても、彼女は止められなかった。

自覚したばかりの恋は、彼女から冷静さを奪っていた。

「リオンも……リオンまで、ファーリッシュという国に行けと言うの？」

泣きそうな声で尋ねた彼女に、リアンリードは残酷なまでに優しい声で告げた。

「行くのではない。帰るのだ……それに、いますぐというわけではない。ファーリッシュの国情が落ち着いてからの話だ。安全とは言い難い場所に、お前を戻すつもりはないよ」

その言葉で、彼女は少しだけ落ち着きを取り戻した。

「本当に？」

リアンリードが、深くうなずく。

「そう……」

呟き、フィオルシェーナは目を伏せた。

身勝手な願いが、胸の奥から湧き上がってくるのを感じた。

きっと間違っているそれを、けれど彼女は捨てることができなかった。

（ファーリッシュなど、いつまでも落ち着かなければいい……）

醜いと知りつつ、胸に抱き続けた願いは、しかし三年後、ファーリッシュに王家が復活し、新王が即位したことで潰えた。

「いやよ！」

フィオルシェーナは叫んだ。

「ファーリッシュになど行かないわ！　わたしがいたいのは……帰ると決めている場所はここだけよ！」

必死に訴えかけた――心のどこかで、リアンリードが聞き届けてくれないだろうことは、わかっていたのだけれど。

「わたしは、ここにいたいの！　ここで、リアンと精霊たちと一緒に、ずっとずっとずっと、一緒に暮らしていきたいの！」

なのに、なぜ、帰れなどと言うの？

それは、この三年、何度となく繰り返した言葉――そして、一度たりとも頷いてはもらえなかった願い。

泣きながら縋りついたフィオルシェーナの真っ直ぐな銀髪を、リアンリードの大きな指が撫でる。

この上なく優しい、だが拒むことを許さぬ決意をたたえた波動が、その指先から伝わってくる。

「わたしも、フィオ、お前のことが大好きだよ。できることならば、ずっと一緒に生きていきたかった……だが、お前にもわかっているだろう？　わたしたちは生きる時と世界が違うものであることは……」

……知っていた。

そんなことは出会った時からわかっていた。それでも構わないと思うこの気持ちを、なぜリアンリードがわかってくれないのか――そのことのほうが不思議だった。

「なぜ……？」

自分は、それでも構わないのに――後に振り返った時、なんと残酷な言葉を口にしたものかと、強い慚愧の念に駆られることになる言葉を、この時彼女は口にした。

「わたしが先に死んでしまうことなんかわかっているわ！　それが、リアンにとって瞬きするぐらいの短い時間だということも！　なぜ、そんな時間さえ、わたしに許してくれないの!?　わたしにとっての家族も家も、もうここしか考えられないのに……っ！」

フィオルシェーナが、昂じた感情のまま、迸るように叫んだ次の刹那――。

リアンリードが、必死に何らかの痛みに耐えるような顔をした。

その表情の意味、そこに宿っていた数多の感情を、彼女が理解したのは、ずっと後のことだった。

ただ、その時、リアンリードは急に静かな眼差しで、彼女を見つめた。

「……フィオ」

呼びかけてくる声には、限りない愛情がこめられていた。

それゆえに、フィオルシェーナは相手が自分になにを為そうとしているのか、気づくことができなかったのだ。

どこまでも優しく優雅な仕種で、リアンリードが彼女の頬に触れた。

そして、その指が、ゆっくりと彼女の額に移る。

眉間を中心に、じん、と痺れてくる不思議な感覚に、フィオルシェーナは養い親が、自分に対して神なる力を行使したことを確信した。

（こんな……こんなこと、狡い……ひどい）

詰りたくとも声すら出せぬまま、全身の力が脱けていく中で、彼女はリアンリードの真摯な、祈りにも似た声を聞いた――と思った。

「愛しく残酷な娘……けれど、お前には人間として、幸せな一生を送って、笑って逝って欲しいのだ。わたしのことなど、記憶に残す必要はない」

その言葉が、耳に入りこんできた瞬間、彼女の中から彼の存在とこの屋敷での記憶が、洗い流されるように消えていくのを感じた。

（ひどいわ、やめて！　こんなの、ひどすぎる！）

抗おうにも、神の力は圧倒的すぎて、フィオルシェーナには為す術もなかった――。

◈　◈　◈

ずっと、ずっと忘れていた。

きっとフィオルシェーナの魂が悲鳴を上げなかったら、一生思い出すことはなかったであろ

う記憶――。

（わたくしは……いいえ、わたしは、なんて罪深い……）

そう思いながらも、彼女は自分の悲鳴を聞いて、駆けつけてきてくれた、優しく美しい柱神の腕に縋りつかずにはいられなかった。

束の間のこととはいえ、確かに夫となったアフレイドを目の前で失った痛みより、再び手に入れたこの腕の温もりを悦ぶ思いのほうが大きい。

記憶の枷を外されたフィオルシェーナは喉が裂けんばかりに、ようやく再会のかなった、最愛の人の名を呼んだ。

「リアン！　リアン！　リアンリード！」

この瞬間の歓喜のためなら、死んだとしても悔いはない。

自らの心の残酷なまでに強い執着を自覚しながら、彼女は愛するひとに手を伸ばした。

青味を帯びた、美しい漆黒の髪、神の眷族ならではの、譬えようもなく美しい紫の瞳――

若々しさと老練さを兼ね備えた不思議な……魅力的に過ぎる存在。

彼は……拒まなかった。否、拒めなかったというべきか。

フィオルシェーナの魂の上げた悲鳴を聞きつけ、駆けつけてくれたリアンリードが少女を抱きしめた時、彼の懐に納められていたと思しきなにかが、眩い紫の光を放ったのだ。

それは、柱神の半身と呼ばれる神宝『冬星』――フィオルシェーナは新たな柱神に選ばれたのである。

6　人の時、神の時

リアンリードは、深い絶望に打ちのめされていた。
養い子を襲った現実は、彼女以上に彼に痛手を与えたのだ。
「なぜ……」
呻きながら、懐から取り出したのは、白金の首飾りだ。
新たな柱神を選ぶ神宝――『冬星』の名を持つそれは、預かった時とは形を変えていた。
神宝は、新たな半身として、フィオルシェーナを選び、彼女に相応しい姿にその身を変えたのだ。
なぜ、彼女の悲鳴が聞こえた時、これを懐に持ったまま駆けつけてしまったのか……悔やんでも悔やみきれない。彼女に人間としての生を全うしてもらいたいからこそ、かつて断腸の思いで手放したというのに……これでは、なにもかもが台無しだった。
柱神とは、この世界の天と地の狭間である『空』を支える百八の支柱――神に準じる力で以

て、世界を守る存在だ。

そのために与えられた寿命は、人間にとっては永遠にも近い長いものなのだ。

それが、生まれながらに与えられた時間であるのなら、苦痛を感じることはないのかもしれない。だが、柱神は人間として生まれ、半身たる神宝に見出されることによって初めて、神たる身に生まれ変わるもの――人間であった頃の記憶と魂を抱いたまま、千年もの時を生きるのは、歓びより苦痛のほうが大きい。

時の重さに押し潰され、人間との接触を一切絶つ柱神も少なくない。逆に、取り残されることを恨みに思い、罪もない人間を殺す者も……数こそ少ないが存在する。

千年という時は、かつて人間であった者にとっては、祝福ではなく呪いなのだ。

リアンリード自身、多くの痛みを味わってきた。愛しい者たちと死に別れるばかりの日々に絶望したこともあった。他の眷族同様、人間との関わりを一切拒んで結界の奥に引きこもったことも――しかし、世界は人々の声に溢れており、完全にその存在を閉め出すことはできなかった。

幼いフィオルシェーナを助けた時、凍えきった小さな指が、必死に自分に縋りつくのを感じた瞬間、自分がどれだけ他者との触れあいに飢えていたのかを思い知らされた。

身元がわからないのを理由に、屋敷に引き取ったのは、彼女のためではなく自分のためだっ

た。

小さな子供は見る間に大きく、美しくなっていった。その美しい青い瞳が自分を見つめる時に浮かべる、保護者に向けるものでない感情の色を認めた瞬間、手放さなければと強く思った——同じ想いが、とうに自分のなかにも芽生えていることを知っていたからだ。

このままでは早晩、彼女を自分が落ちたのと同じ地獄に引きずりこまずにいられなくなるのはわかりきっていた——彼女とともに生きるために。そして、彼女の死による永遠の別離を避けるために。

身勝手な理由だ。

千年の時を生きようとも、この心はあくまで人間のものなのだと思い知らされる。

しかし、そんな理由で、永劫ともいえる時を、彼女に押しつけることはできない。精霊と交感能力のある彼女なら、神宝に気に入られないはずがないという確信があるからこそ、強くそう思った。

彼女には、人間として幸せな一生を送ってほしい——その一念で、身を切られるような思いを圧して手放した。

それでも彼女が不幸になることだけはないよう、精霊を介して、遠くから常に見守っていた——いや、それは言い訳に過ぎない。

自分はただ、彼女を見つめずにはいられなかったのだ。
そして、あの時――あの刹那。
フィオルシェーナは魂そのものを、自ら砕かんばかりの衝撃を受け、悲鳴を上げた。様子を見守る余裕など持てぬまま駆けつけて――ああ、なぜあの時、懐に『冬星』を抱いていることを失念したのか！
彼女は新たな柱神として、選ばれてしまった……。
「……いや」
白金の神宝を握りしめながら、リアンリードは低く呟いた。
「まだ、遅くはないはずだ……」
と――。
選ぶのは神宝だが、半身となることを受け入れるか否か――それを決める権利は人間にあるのだから。
なんとしても、彼女に『冬星』を拒ませなければならない。
フィオルシェーナを説得するために、リアンリードは重い腰を上げる。
全身に絡みつくのは、甘すぎる誘惑の鎖。
抗い、断ち切るには、渾身の力が必要だった――。

◈　◈　◈

「いやよ！」

フィオルシェーナは即答した。

記憶を解放された彼女が望んだことは、ただひとつ。

それを阻むのなら、相手がたとえリアンリードであっても、決して譲らないと、強く決意して続けた。

「もう離さないで！　一緒にいさせてちょうだい！　わたしのためであろうとなかろうと、わたしはもう、リアン、あなたと離れていたくない！」

しがみついて、みっともないぐらい、夢中で叫んだ。

リアンリードが、人間としての自分の生を尊重してくれていることぐらい、わかっていた。

それでも、もう譲れないのだ。

人として生きた結果、多くの人を不幸にしたからではない。

彼女自身、どうしても譲れない望みがあることを認めたからだ。

このひとと、ともに生きたい。

死ぬまで——死んでも。

そう思う相手は、リアンリードただひとりなのだ。

だから、だったのだ……かつて、この記憶を失っていた間、王家の人間として責任を果たすべく、未来をどこか他人事のように決めていけたのは。

そう、今更ながらに、過去の自分のありようを理解する。

あの頃の自分はリアンリードを覚えていなかった。彼という絶対にして唯一の存在を、彼自身の力によって、記憶の奥に封じられ、自覚さえしていなかった。

だから……なにもかもが、曖昧で自分自身に対してすら無責任に振る舞えたのだ。

持ち込まれた縁談を、躊躇いもなく受け入れたのは、ファーリッシュの王族としての義務感などからではなかった。

リアンリードでなければ、他の誰でも同じだと、魂が感じていた、それだけのことだったのだ。

それでも、アフレイドを選んだのは、その面差しに、心の淵に隠されたリアンリードのそれを見いだしたがゆえのこと。

けれど、そうして決めたことは、結局皆を不幸に追いやるばかりだった。

アフレイドを愛しているわけではない、別の誰かを捜す眼差し——今なら、わかる。自分は

リアンリードを求めていたのだ――が、恐らくはカストライドの関心を引き寄せ、彼の征服欲を刺激したのだ。

そうして、結果としてアフレイドを死に追いやってしまった。

あの場に取り残されたナナレイダの命も、今は尽きているかもしれない。

それでも、リアンリードに再び見えることができたことのほうが嬉しいのだ。自分を知る全てのひとから、身勝手だと誹られてもかまわない。

彼のそばでしか生きたくない。

そばにいられるのなら、何であれ受け入れる。

そして、幸運にも、自分にはその鍵が与えられたのだ――新たな柱神と生まれ変わることで、彼とともに生きていけるという未来を約束してくれるそれが。

「拒まないわ！　どうして拒まなければならないの!?　永劫の時？　それがなんだというの、わたしにはあなたといられる今とこれからだけが大事なの！　お願い、リアンリード……『冬星』をわたしにちょうだい。そして、あなたの手で、わたしをあなたと同じものに生まれ変わらせて」

それでも……そこまで言っても、リアンリードはうなずいてはくれなかった。

彼の瞳を見ていれば、自分を愛しく思ってくれていることは伝わってくるというのに……ど

うしてこんなにも頑なに拒むのか。

この思いが、あくまで自分の一方的なものであったなら、彼女は諦めることができたのかもしれない。だが、『冬星』との接触によって、不完全ながら、神の視界を得たがために、リアンリードの想いを知ってしまった今、退くことはできなかった。

正直なところ、泣きたかった。

ここまで訴えても、応えてくれないリアンリードを動かすのは無理ではないか……と、思わずにはいられなかった。

それでも、駄目でもともと——いや、一番の望みがかなわないのなら、それも選択肢のひとつだと、傷だらけの心で決めたことを、フィオルシェーナは口にし……否、叫んだ。

「あなたがどうしても嫌だというのなら、わたしはエン・リュウさまに、生まれ変わりの儀式の祭主をお願いするわ！」

エン・リュウの名を聞いた瞬間、リアンリードの紫の双眸に動揺が走った。

そこに浮かぶのは、紛れもない嫉妬の焔——。

フィオルシェーナは勝利を手に入れたのだ。

ぎこちなく伸ばされた腕が、自分を抱きしめ、髪を撫で、その指先が首筋へ、さらにはその下へと滑っていくのを感じながら、彼女は喜びの涙をこぼした——。

◇　◇　◇

それは、神聖なる儀式――恋ゆえにそれを利用しようとする自分には、いずれきっと神罰が下るに違いない。

（それでも、かまわない……）

半身である冬星を身につけたまま、フィオルシェーナは焦がれたひとの指が、肌を愛撫する感触に酔いしれた。

人間から柱神に生まれ変わるためには、神宝との接触と、年長者である柱神との交わりが不可欠であり、その相手を選ぶことは、年少者にのみ許された権利だった。

千年の時の代価として、それが果たしてどれほどの対価を持つものか――。

わからないけれど、いまこの時、悔いは一片たりとてなかった。

リアンリードの指先が、優しく背中を撫でる。

それだけで、体が反り返ってしまう。

彼の舌が乳房を這い、かと思うと、ときどき強く吸い上げられ、肌の上に赤い花びらが散り……次第にその数を増していく。



……気が、遠くなりそうな快楽の嵐だ。
唇から洩れる吐息の熱が、そのまま全身に広がっていく。
かつて嵐は、フィオルシェーナから熱と力を奪い取っていった。
けれど今、この身を支配し、翻弄する嵐は……力こそ奪っていくものの、逆に熱を注ぎこんでくる！
「ああ……あ、ぁぁ……リアン……！」
（死ぬなら、いまこの瞬間がいい……っ！）
思った瞬間、想像したこともない激しい熱が、彼女を呑みこんだ。
「は……あぁぁぁぁっ！」
歓喜の中、恋の炎に灼き尽くされて――。
そうして、フィオルシェーナは千年の時を生きる存在へと生まれ変わった。

エピローグ

「馬鹿な娘よ」

吐き捨てるように呟いた女主人の声には、消すことのできない苦い響きが宿っていた。

「結局その娘は、恋する相手の心のことなど、なにも考えていなかった……なぜ、彼が自分を手放そうとしたのか、なぜ人間としての生をあれほどに望んでくれていたのか。彼が一位と呼ばれる存在である意味にすら、気づくことができなかったの」

位階で呼ばれる柱神は、ごく特殊な例を除けば、長老である。

一位とは、その最たる者――各属中、最も長く生きた者を指す。

それは、千年に及ぶ生の辛さを味わい尽くしてきた者であることを意味する。そして、遠からず生を終える身であることも。

「彼が身を以て味わってきた絶望も、せめてもと望んだ未来も、その娘は踏みにじったのよ……彼の時が尽きるとき、なぜ心安らかに逝かせてあげられなかったのか……『お前のことだ

けが心配だ』などと、なぜ言わせてしまったのか……！」

堪えきれぬ様子で、俯いてしまった屋敷の女主人を、ワン・ヤーンは痛ましげに見つめた。

もう――わかっている。唾棄するように友人が口にする『愚かな娘』とは、過去の彼女自身のことなのだ。

愛するリアンリードを最期まで苦しめた自らを、彼女は未だに許せずにいるのだ。

「フィオナ……」

その名を口にしたものの、それ以上なにを言っていいのかわからず、ワン・ヤーンは目を瞑った。

（それでも……それほどに愛し愛されたリアンリードさまが、不幸であったとは思えないけれど……）

口にすべきかどうか、迷うワン・ヤーンに、フィオルシェーナが続けた。

「けれど、本当に愚かしいのは、その娘は何度時を戻しても、同じことを繰り返すに違いないと、確信できてしまうことなの。だから、わたしは……もう、恋はしないの」

きっぱりと言い切った友人の顔は、これまで見たこともないほどに美しく見えた。

二度と気軽な恋など勧めないと、心に決めてワン・ヤーンは席を立った。

フィオルシェーナ自身がどう感じているとしても、彼女の抱える恋の記憶は、深い絶望と苦

痛に彩られてもなお、輝かしい宝石だと思えたからだ。
それでも、いつか、と願わずにはいられない。
（いつか、今度こそ――幸せな恋を）
大切な友人の未来に対するワン・ヤーンの祈りは、夕暮れに真紅に染まる空に溶けていった――。

月を、恋う

プロローグ

その日、大陸北部の大半を領土とするアストニア皇国の首都――エセル・プラウニカの中心に聳えたつ皇宮の一郭で、ひとつの命が誕生した。

皇帝ガーランス五世の正妃ワルルーシアが、男児を産み落としたのである。

すでに皇子は三人いたが、正妃が産んだ初めての男児ということで、その子供は生まれた瞬間から光を約束された。

生まれながらに豊かであったその髪は輝く金、程なく開いた瞼から覗く瞳は黄昏の紫――。

美貌で知られる両親の資質を、余すことなく受け継いだ、生まれながらに美しい赤子であった。

皇宮は歓びに包まれ、すぐにそれはエセル・プラウニカ全体に伝播した。

皇子ファナルシーズ――。

後にアストニアの至宝と呼ばれることになるこの赤子の誕生を――。

祝福したのは、しかし人間ばかりではなかった――。

◈　◈　◈

その日、世界中の精霊が歓びの声を上げ、祝福の歌を詠った。

――一位さまが！

――一位さまがお戻りになった！

その声を耳にすることができる者は多くはなく、その意味を真実理解できる者の数はさらに限られた。

アズアーダ王国の北の国境程近くに広がる、『針の森』――。

その森の奥深く、幾重にも張られた結界に守られた小さな屋敷の女主人は、声もなく涙を流していた。

◈　◈　◈

「……」

震える唇が刻む、あるひとつの名。

しかし、そこに声はない。

それ――は、あくまで過去のものに過ぎなかったから。

かつて、彼女が最期を看取ったひとと、同じ魂を持っているとはいえ、今この瞬間、世界に生まれ出でたのは――誕生したのは、かのひととは違う人間であったのだから。

真っ新な状態にある魂に、最も強い『名前の呪』をかけるわけにはいかない。

見つめることさえ、本来なら控えるべきだとわかってはいるけれど、そこまで抑えることはできない。

(ごめんなさい……)

決して伝わらぬ言葉を、やはり声なく呟き、彼女は目を伏せる。

(それでも、見守ることだけは、許して……他には何も望まないから)

精霊の祝福とともに生まれ落ちた『人間の子』に、世界の天と地の間――『空』を支える柱神である女性は希う。

祈るのは、かのひとの幸福――幸せな人生。

そう――『人間』としての……。

美しい女性が泣いている。
その髪は銀、極上の紫水晶の瞳いっぱいに涙をたたえ、自分を見つめてそのひとは泣いている。
『逝かないで』
あるものを握りしめ、決して放さぬと言わんばかりに、指が白くなるほどに強く――摑んで、彼女はただひとつの願いを繰り返す。
『お願い、――――、逝かないで』
その声、その言葉がはっきりと聞こえるのに、なぜか彼女が口にする、自分の名前だけが聞こえない。
いや、それは本当に自分のものなのだろうか？
目に映る、彼女が必死に握りしめるもの――限られた視界から判断すれば、恐らくは自分の手だと思われるもの……だが、それは現実に見知る己のものではない。
まず、大きさが違う。

肌の色はともかく、形状も違う。

自分の手は、こんな痩せた、骨ばかりの……皺の寄った、老人のものではない。

老いた自分に、ひたすらに、同じ言葉を繰り返す彼女——愛しさと慚愧の念で、胸がいっぱいになるが、それが自分だとは、なぜか思えない。

彼女がもしも、自分のこの名を呼んでくれたら、たとえ枯れ木のようなこの手の主に、今ここで変じたとしても、悔いることはないだろうに、と老いへの恐怖も苛立ちも、想像することさえできない若さゆえにか、思う。

美しい彼女、愛しい彼女。

けれど彼女が見つめているのは自分ではなく——見つめられている『夢の中の自分』もまた、今の自分とは違う存在なのだとわかる。

それが歯がゆくもどかしい。

なぜ、彼女を泣くままにさせているのか。せめて、その涙を拭ってやらないのか。

なのに、夢の中の自分は、最早指一本動かすことができず、顔を覗き込んでくる彼女の泣き顔をただ、見つめることしかできないのだ。

なんという無力感か。昼間の、現実の自分にあっては、ついぞ覚えたことのない感情に、悔しいやら情けないやら……この夢そのものさえ、憎らしくなってしまう。

そう、夢だ。
これは夢だとわかっている。
幼い頃から繰り返し、何度も何度も見てきた、変えることのできない悪夢――。
目覚めた時に襲われる空虚さまでも、いつも同じだから疑いようはない。
それでも――。
『逝かないで――』
希う彼女の声を聞きながら、手を伸ばすことさえできずに、今夜も自分は彼女を置き去りにして、闇に融ける。
『――――っ！』
彼女が最後に呼ぶ、『夢の中の自分』の名を、今度もまた拾うことができないまま――。

◇　◇　◇

夢から覚めた彼――アストニア皇国第四皇子ファナルシーズは、気だるい体に鞭打つように、寝台から起き上がった。
暖炉の炎は暖かな光を放ち、室内を凍気から守ってはいたが、外套も羽織らずにいられるほ

どの暖気を与えてはいない。

しかし、彼は構わず窓へと歩んだ。

窓を開け、鎧戸を開け、凍気が部屋に流れこんでくるのも構わず、彼は空を見上げる。

「やはり……」

想像した通りのものを目にし、彼は息をついた。

夕刻までの吹雪が嘘のように、晴れ渡った夜の空には、銀盤が浮かんでいる。

夢を見るのは、決まって月が美しい夜だと、そう気づいたのはいつのことだったか。まるで月が見せているかのようだ。

「……どこに、いる……？」

囁きは風に融け、誰にも届くことはなかった。

1　光の皇子

神学院に籍を置くシヲンが、初めてかの皇子に会ったのは、彼が十三歳、皇子が十二歳の時のことだった。

輝く美貌と才知で知られる、第四皇子にして次期皇太子と見なされるファナルシーズのことは、無論知らぬはずがなかったが、実際に会うことがあろうとは、思いもかけぬことだった。

神学院長直々に呼び出され、皇子が自分に会いたがっていると聞いた時には、あまりのことにすぐには信じられなかった。

「ファナルシーズ殿下が、わたくしに、ですか？」

赤味がかったふんわりした金の髪をかきあげながら、シヲンは驚きをたたえた榛の瞳を揺らした。

なにかの間違いでは――と言いかけた彼に、学院長である初老の男性は、ゆっくりとかぶりを振った。

「是非、話を聞きたいとの仰せだ。君が見聞きした不思議について――」

その言葉で、ようやくシヲンは得心した。

(ああ、そういうことか……)

神殿でも一部の者しか知らない、自身の事情を、恐らく誰かが皇子に話したのだろう――。

「お話しできるようなことはないと思いますが……」

興味本位で聞かれたくはない事情だったこともあり、シヲンは控えめながら、本気の拒絶を滲ませ答えた。

学院長は微かな同情をこめた目で彼を見遣り、しかし彼の願いを退けた。

「言ったろう、殿下は是非にと仰っているのだ」

苛立ちが、ちり、とシヲンの胸を焦がした。

彼が今、求められているものが、頷くことだけだとわかるからこそ、彼は怒りを覚えずにはいられないのだ。

高貴な方の無邪気な好奇心を満たすためだけに語るには、彼が抱えこんでいるものは重要且つかけがえがなさ過ぎた。どうしても、それを望んだという相手に対する印象は悪くなる。

(なにが、光の皇子だ。なにがアストニアの至宝だ。己が好奇心を満たすためだけに、他人の大切な記憶を暴くつもりなのか)

それが許されて当然だとでも思っているのか――。

肖像画でしか見たことのない、優美な皇子の姿を脳裏に浮かべながら、シヲンは声なく罵った。

だが、どれほど忌まわしく思おうと、それを口に出すことは許されない。

シヲンは一介の神学生に過ぎず、相手はこの国の、おそらくは未来の皇帝となる人物なのだから。

「……わかりました」

という彼の答えに、学院長は、明らかに安堵した様子で頷いた。

そういう事情であったから――シヲンの、ファナルシーズに対する印象は、出会う前から最低だった。

そう……出会う前――直にその姿を目にするまでは。

アストニア帝国第四皇子ファナルシーズの風評は、聞くつもりがなくとも耳に入ってくるほどに華々しいものがあった。

皇帝ガーランス五世最愛の正妃ワルルーシアが産んだ、正統なる皇子。
輝く金髪と、極上の紫水晶を思わせる双眸、透けるような、だが病的ではない白皙に、優美でありながら軟弱ではない美貌。
その早熟な才能は、学問芸術を問わず発揮され、国内屈指の有識者たちが、手放しで褒め称えるほど。
所作はどこまでも優雅で、その優しい気性は会う者を魅了せずにはおかない。長ずればどれほどに——と、天から二物も三物も与えられたと評判の皇子に対し、シヲンの印象は、前述の事情ゆえによろしくなかった。
しかし、相手は次の玉座に最も近いといわれる少年だ。
不快さを押し隠し、指定された日、迎えに寄越された馬車に乗り込もうとした彼は、突然目に飛び込んできた、眩しい光に目を瞠った。
光の奔流のような髪のせい——だけではなかった。
馬車の中で彼を待ち受けていたのは、明らかに自らが放つ光で輝くひとであったのだ。
圧倒的ともいえる存在感をたたえた少年は、ここにいるはずのないひとで、しかもその気配は、シヲンがなにより大切に思う記憶のなかのひとのものと酷似していた。
(馬鹿な……どうして、こんな所に……!? いや、違う……違うはずだ……そんなはずが



……!?)

あるわけがない――。

「……ど……して、……」

何を問いたいのかもわからぬまま、呆然と言葉を紡いだシヲンに、光の化身はにこりと微笑みかけた。

「シヲン・オーダック？」

確認するような声は、まだ高さの残る――一度耳にしたら忘れられぬものだった。

(ああ、声までいいんだ……)

ぼんやりと、そんな埒もないことを考えながら、シヲンはひたすらに目の前の少年――ファナルシーズ皇子を見つめていた。

そんな視線にも慣れているのか、光の化身のような少年は、困ったように首を傾げた。

「すまないが、乗ってくれないか？」

命ずることにいささかの躊躇いも覚えぬ立場にある彼は、しかし頼みを口にした――それでも、こちらが頷くことを疑いもしていないのは明らかだったが。

「は、はい」

慌てて頷き、シヲンは馬車に乗り込んだ。

すぐに走り出した馬車に揺られながら、シヲンはいつまでもファナルシーズから目を離すことができなかった。

噂以上に際だった容姿に加え、不可視の光を纏う存在は、到底人間とは思えぬ存在感をたたえているというのに、気配はあくまでも人間のものなのだ。

不思議で奇妙で、なにかが間違っているような気さえする。拭えない違和感ゆえに、ただ見つめることしかできず、シヲンは口を開くことも忘れていた。

そんな時間がどれほど流れたのか、やがて、年下の皇子が、小さなため息とともに、苦笑を洩らした。

「穴があくまで見つめるつもりなのか？」

まだ声変わりも終えていない、澄んだ声ながら、そこに宿る絶対の力に、シヲンはようやく我に返った。

挨拶すらせず、凝視していた己が無礼に気づき、血の気が引いた。

「ご、ご無礼を……！」

慌てて頭を垂れ、謝罪した彼に、ファナルシーズはまたしても苦笑したが、その身に纏う空気に、怒りは宿っていなかった。

そのことに安堵しつつも、シヲンはこれからどうしていいのか、途方に暮れた。

これまで、『人間』を前にして、これほど緊張したことはなかった。
おそらく、皇帝そのひとと対峙したとしても、ここまで困惑することはないだろうと思う。
なぜなら、皇帝とはいえ、それはあくまでも人間に過ぎず、一時期とはいえ、神たるひとと暮らしたことのあるシヲンの心を縛りつけることはできないのだから。
無論、現世における皇帝の力は絶対であるから、畏れないわけではないが、心そのものが呪縛されるような感覚を味わうことはないと言い切れる。
そうである以上、ファナルシーズに対しても同じでなければおかしいはずなのだが……どうにもわからない。
(なぜ、この方はこんな光を纏っているのだろう……?)
否――纏っていられるのか。
人間が抱えるには強すぎる光……毒とさえなりうるそれを。
そんなことを思っていたものだから、シヲンは馬車の窓から見える風景に気づくのが遅れた――なまじ見慣れた街並みだったために、尚更に。
しかし、それはおかしいのだ。
シヲンが見知っているそれは、皇宮とは全くの別方向にあるのだから。
(皇宮へ、向かっているのでは、ない……?)

遅まきながら、そのことに気づき、内心首を傾げた彼に、輝く皇子はまた、困ったような笑みを浮かべた。

「どこで聞きつけたものか、君を招いたことが兄たちに知れてしまってね。同席すると言って譲らないから、今日の予定は取りやめにしたんだ」

ファナルシーズの言葉が、すぐには理解できなかった。

予定を取りやめにした――と言いながら、ここに同席しているひとは、いったい誰だというのか。

「殿下……？」

困惑も露に、首を傾げた彼に、ひとつ年下の皇子は、その年頃に相応しい、悪戯めいた顔で答えた。

「今頃、兄たちは残念がっているだろうな。よりにもよって、こんな日に、風邪を引きこみ、寝台の住人となった弟のせいで、せっかくの機会を逃した、と」

言葉の意味が、頭に染みこむのに、多少の時間がかかった。

そうして、ようやく理解した時、シヲンは呆れて目前の皇子を見返した。

（仮病を使ったのか……押しかける兄皇子たちをかわすために……？）

そうしておきながら、自らは迎えの馬車に乗り込んで、皇宮から抜け出して――。

理由は、間違いなく自分と会うためだろう、それも兄たちに邪魔されぬように。

「そんな目で見ることはないだろう？　わたしだって、何度も何度も頼みこんで、ようやく取り付けた約束なのだから……限られた時間を、兄上たちの下らぬ好奇心で食い荒らされたくはなかったのだ」

少しばかり拗ねた口調での言い訳が、なにやら微笑ましく、（ああ、このひとは、それでもやはり『人間』なのだ）と半ば安堵しながら、シヲンは思わず軽い調子で問い返してしまった。

「好奇心ゆえではないと仰る殿下が、わたくしに会いたいと思われた理由をお尋ねしてもよろしいでしょうか？」

皮肉るつもりではなかったが、口にした瞬間、そう取られても仕方のない言葉選びをしてしまったことに気づき、ひやりとするものを覚えたが、相手は気にする様子もなく、逆に問い返してきた。

「誰が、好奇心ゆえではないと言った？」

不遜で傲慢な——それでいて、どこまでも優雅な笑みを口元に刷き、ファナルシーズはひた、とシヲンを見つめた。

シヲン・オーダック――。

アストニア北部の山間にある寒村の、農家の夫婦の間に生まれるも、生後間もなく事故により父親が命を落としたがために、絶望した母親もろとも行方知れずとなる。

夫を喪った衝撃に、言動が不安定になっていたという若い母親とその赤子は、ある吹雪の夜に粗末な家から姿を消し、険しい山の入り口付近で、母親が愛用していた肩掛けが見つかったことで、村人は覚悟の心中だと判断し、捜索は早々と打ち切られた。

だから、シヲン・ヨールという人間は鬼籍に記されたままである。

代わりに存在するのは、十年後、青き三対の翼を持つ、伝説にしか登場しないと言われる嵐鳥を繰る、御柱たる存在によって人間の世に戻され、即座に朱橙神神殿最高祠祭たるマナレド・オーダックの養子に迎え入れられたシヲン・オーダック。

この世界の天と地との狭間――『空』を支える柱神の養い子にして、精霊たちと心通わせ、さらには夢に通じる不思議な力を持つ少年。

いずれは、神々の一員に迎え入れられてもおかしくはない資質を持つ、たとえそうはならずとも、柱神の加護を持たぬこのアストニアにあっては、重要な意味を持つ――神との架け橋

……。

（――という情報は、すでにこの殿下には筒抜けなんだろうな）

馬車に揺られ、着いた先で、こうして長閑に茶をともにしている現状から、そうとしか思えないと、シヲンは密かに息を洩らす。

一般的には、マナレド・オーダックの養子としか――事情にある程度通じている者たちにしても、『柱神の養い子』とまでしか認識していないはずの自分を見据えるファナルシーズの眼差しを感じながら、まず間違いなくそこまで知られていることを、この段階に至って、シヲンは確信せざるを得なかった。

なぜとなれば、仮病を用いて皇宮を抜け出して来たと、ぬけぬけと言い放った、光の皇子と呼ばれる少年が、彼を連れ込んだ先はといえば。

シヲンの現在の保護者である、朱橙神神殿の最高祠祭マナレドの屋敷であったからだ。

義父の構える屋敷の中で、最高の賓客をもてなすために用意された、豪華にして荘厳な一室は、滅多に用いられることがない部屋と記憶していたが、そこで何ら気後れすることなく、また見劣りすることなく、悠然と出された茶を手に取っているファナルシーズを前に、何と言うべきかわからずに、困惑しきりなシヲンだった。

これが、ファナルシーズ以外の人物による行為であったなら――たとえそれが、アストニア

皇帝が相手であろうとも、怒りを隠そうとも抑えようとも思わなかったに違いない。

半端にしか事情を知らぬ者たちに対しては、用心も兼ね、下手に出ることで無用な注目を集めぬよう心がけてきたとはいえ、シヲンは――彼という存在は、なによりも力強い神の加護を得るための鍵なのだから。

その事実ゆえに驕るほど、シヲンは単純ではなかったが、その事情が自らを守る盾となるとは信じていただけに、この状況は落ち着かなかった。

目の前にいるのは、自分以上に輝かしき光を放つ、世継ぎと見なされる皇子。

彼という存在があれば、自分などに望みをかける必要などないではないか――卑屈さからではなく、正直にそう思うのだが、生憎誰も自分の内なる問いに答えてはくれない。

（つまり、最初は皇宮に呼びつけるつもりだったのが、兄皇子たちの邪魔が入ると知って、多分影武者を立てた挙句、自分は単身抜け出して、それと前後して朱橙神神殿に連絡を入れて、マナレドさまに断りを入れて……）

想像というか、経緯を読むことはできるのだが、それを実現させるのはどうにも難しいとしか思えず、しかし実際にこの場でふたりでいるという現状に、なんと言っていいのかわからなくなる。

「……ここまで、無理を通す必要がありましたか？」

一見したところ、願いが実現することが当たり前となった子供のわがままにも見えるが、そうではないことを、直感且つ確信してしまうからこそ、ファナルシーズへの問いには困惑の響きが色濃く浮き出た。

対する皇子の答えは曖昧だったが、それでいて明瞭な意思をたたえたものだった。

「わからない……が、こうしなければならないと思ったのは確かだ。わたしは、どうしても聞きたいことがあって、だが、普通に問いかけたのでは、求める答えは得られないと思ったからね」

無茶苦茶な、論理とも呼べない話運びだったが、なぜか、それはそうだと感じるところがあって、シヲンは降参した。

目の前にいるひとは、間違いなく『人間』であるのに、放つ圧倒的な力と光は、寧ろ彼が尊敬してやまないひとのそれに酷似していた。

人間では……少なくとも、当たり前の人間ではない。

「……なにを、聞きたいと望まれるのですか？」

促されるように、口にした問いに、今度こそ皇子は簡潔に応えた。

「御柱たる方が見つめる先を――」

と。

優しい、優しい養い親は、時折ここではない、どこか遠くを見つめていた。
その先を辿ろうとして、だが決して叶わないことに、泣きたいような思いを嚙みしめながら、シヲンは彼に、その眼差しの先を尋ねる。
「なにを見てらっしゃるのですか？」
物心ついた時には、精霊と優しい養い親の力で守られた楽園にいた彼は、周囲の精霊たちが敬う存在に、彼らに倣った態度を身につけていた。
養い親である、朱橙の双眸を持つ御柱は、そんな彼の態度に時折淋しげな素振りを見せたが、すでに身に――否、魂に刻み込まれたそれを、改めることはできなかった。
心のどこかで感じていたからこそ、自分の有り様をそう定めたのだろう――とは、人間の世に戻ってから思ったことだ。
人間であることを卑下するつもりは皆目ないが、それでもともにあるのが当たり前の日々の中で、養い親との決定的な相違点に気づかぬほどに、シヲンは鈍くはなく、そうと知った上で、同じモノとして振る舞えるほど神経は太くなかった。

美しすぎる養い親、精霊たちの愛を受けるに相応しい、素晴らしすぎる養い親。
自分とは明らかに違う、特別な力を秘めた、綺麗な朱橙の双眸を持ち、自分とは違う世界を見つめている養い親。
同じモノを見つめたくて、必死にその眼差しを追って、探して。
けれど、見つけることができないから、悔しさと情けなさを噛みしめながら、ついには尋ねた。
養い親であるひとの、綺麗な朱橙の瞳に浮かぶ光が、あまりにも哀しそうに思えたから。
彼にこんな目をさせる対象が、憎くて仕方なかった。
辛そうな目で見るぐらいなら、いっそ見なければいいのに――と、養い親を責める思いを自覚した瞬間、そうではなく、こんな目をさせる『何か』こそが悪いのだと断じて。
自分になにかできるとは思えないまま、それでも養い親にそんな目のままでいて欲しくなくて、縋るように見上げて、問うた。
意識を彼方から戻した、優しい養い親は、まだ小さなシヨンの前で膝を折り、同じ高さに目線を合わせ、謝った。
「ああ、シヨン、悪かった。そんな顔をしないでおくれ」
泣き出しそうになっていたのだと思う。

困ったように笑む瞳には、確かに自分のことを気にかける光が浮かんでいたから、少しだけほっとして、そうしたら今度は逆に怒りが湧いて、彼は仏頂面になって、相手を非難した。

「だったら、父様も、あんな目で、遠くを見ないでください」

遠い、遠い、自分には見えないどこかを、とても哀しい目で見つめるひと――。

その姿を目にする度に、地団駄を踏む思いを噛みしめるしかないのに……一方的に、こちらにだけ止めろというのは横暴だ。

心からの憤慨をこめて、そう主張したシヨンに、「それは悪かった」と、養い親はあっさりと謝罪し、けれど「そうしよう」とは約束してくれなかった。

代わりに、ぽつりと洩らされた、吐息まじりの切ない呟き。

「あらゆる忘却を拒むなど、辛いだけの選択であろうに……なのに、あの方は……」

その言葉が向けられているのが、自分ではないとわかってはいたが、嫉妬することは、シヨンにはできなかった。

養い親の瞳に浮かぶ、あまりにも痛ましげな光がゆえに。

◇　◇　◇

だから、シヲンは神たるひとが見つめる世界を知らない。
ただ、その瞳に映る世界が、優しいだけではないこと……否、厳しさこそが多い、もしかしたら残酷なそれであることを、想像できるだけだ。
だが、ぽつり、と洩らされた養い親の呟きは、彼の脳裏に刻みこまれた。
「幸福も不幸も、全て受け入れるあの強さゆえに、あの方はあれほどに輝いていらっしゃるのだろう……哀しすぎる輝きではあるけれど」
そうして、ぎゅっと、抱きしめられて――。
「シヲン」
と、耳元で囁かれた。
「わたしには、到底、真似できないよ……」
絞り出すような、苦しげな声を洩らす養い親を、慌てて見上げた彼が目にしたのは――。
何か、逃れ得ぬものを見据えながら、恐れ戦く養い親の表情だった。
それでも、その視線の先を辿ることはできない。
幼さゆえか、存在の次元の差異ゆえか――。
見極めるには、シヲンはまだ幼く、また大切なひとのそんな表情を見続けてはいられなくて――細い腕を養い親の首に回して、力をこめた。

だから、彼は知らない――世界の『空』を支える存在が、どこに、なににその眼差しを向けているのか、その先を――。

2　神々の見る先

「……といったことがございました」

皇子の問いの答えとなるかどうかはわからないものの、記憶を浚った際、浮かんできた記憶を拾い上げ、シヲンは語った。

彼の話を興味深そうに聞いていたファナルシーズは、満足したのかどうか、傍目にはわからぬ顔で、小さくうなずいた。

「そう……」

と頷く声は、やはり響きで判じるには難しいもので、シヲンはどうしたものかと考えた。

そもそも、皇子の問いが難題だったのだから、きちんとした答えを用意できるほうがおかしいのだが、尋ねるファナルシーズの紫の双眸に浮かぶ光が切なげであったので、少しでも意に沿う答えを返したいと思ったのだが、うまくいったかどうかは謎だ。

「何方のことを指して仰っていたのかは存じません。ただ、あの方や時折おいでになる方々

が、揃って同じような目で、その方のことを語ってらっしゃったことは覚えております」

そう続けて、シヲンはこれが、皇子の問いとは微妙に違うことであることに気づき、しまった、と思った。

養い親たる柱神が、遠い目をする時、その思いが向けられる先が常にひとつであったため、答えに替えてしまったのだが、皇子が求めているのはそうしたものではないだろう。

だが、そうすると、そもそも答えそのものが自分の中にはないことになる。

「申し訳ございません」

思わず謝罪の言葉を口にすると、ファナルシーズが驚いた顔を向けてきた。

「なにを謝るの？」

ひとつ年下であるはずの皇子の目に浮かぶのは、しかし年長者が下の者を気遣うような光で、それをごく自然に受け入れている自分に気づき、シヲンは困惑する。

不思議なひとだ、と思う。

「いえ、答えとも呼べぬものしかお返しすることができませず……」

そのことが悲しく、彼は知らず瞼を伏せた。

「ちゃんと答えてもらったよ。かの方々にとってさえ、世界は感情なくして見つめずにはいられないものなのだと……忘却の優しさに身を委ねられる方もいらっしゃれば、そうでない方も

いらっしゃると。永劫にも近い時のなかで、忘れることを禁じるとは、どれほどの強き心がなせるのか……それは、想像を絶することだとは思うけれど」

囁くような声には、痛ましげな響きが宿っていた。

至尊の存在を、彼は案じているようにも見えた。

彼でなくば、なんと思い上がった傲慢さかと、眉を顰めるに違いない態度は、しかしその不可思議な存在感ゆえに、なぜか自然なものに思える。

「なぜ、御柱の方々の眼差しを気になさるのですか？」

不躾だとは思いながら、シヲンは浮かんだ疑問を口に乗せた。

普通、柱神の眼差し――意識の有り様に、心を馳せる者はいない。不遜だという意識さえなく、人間にとって、神は神であるがゆえに、理解及ばぬものだと、心に刻まれているからだ。

神殿にあっても、それは変わらない。

いや、神に近いとされる場所で生きる者ほど、その傾向が強い。

為政者たることを定められた身であるから、この皇子にはそうした枷がないのだろうか。いや、そうとは思えない。

なにがどうとは言えないが、この皇子は確かにどこかが違うのだ。

「これといった理由はないよ。ただ、何となく興味があっただけ……というのは、通じないの

だろうね」

穏やかな笑顔で誤魔化そうとしたファナルシーズは、咎めるようなシヲンの目に気づいたのだろう、苦笑混じりに続けた。

当然だ。

何となく――で、振り回されては堪らない。必死に答えらしきものを掻き集めたのは、彼の真摯な態度に応えたいと思ったからだ。

「しかし、困ったな」

と、ファナルシーズが首を傾げる。

子供っぽい仕種でありながら、その落ち着いた雰囲気故に、大人が困っているようにしか見えない――実際には、十二歳の少年であるというのに、その事実こそが嘘のように思えてしまう。

「これという理由は、本当にないのだ。ただ、昔から、わたしには漠然とした疑問があり、その答えを得る一助になるかと……我ながら、わけがわからないことを言っているね」

本当にその通りだが、どうやら相手は大真面目らしい。

聡明で知られる皇子が抱える、具体化さえできぬ疑問とは、いったいどんなものだろう――とは思うが、本人にも把握できぬものが、他者にわかるはずがない。

（至尊の方々のありようが、『一助』、ね……）

自分の問いの答えとはなっていない、しかしファナルシーズにとっては他に答えようがないらしい言葉に、シヲンは内心ため息をこぼした。

「では、やはりお詫びしなくては。わたくしが、何の役にも立てなかったのは確かですから」

つまりは、縁もここまでということだ——期待に添えなかった自分に、ファナルシーズが興味を抱き続けるとは思えない。

そのことを、残念に思っていることに、言葉を紡いでから気づき、シヲンは内心眉宇を顰めた。好意の片思いとは、何とも切ない——もっとも、目の前の皇子に、自分と同じような思いを噛みしめている者は、数えられぬほどいるのだろうが。

と、そこまで考えた時、ファナルシーズが驚いたように目を瞠った。

先ほどとは違い、今度は歳相応の少年に見える表情——身を包む空気さえも変化していた。

くるくると、目まぐるしい。

「いいや？　役に立たぬなどとんでもない。わたしこそが、謝るべきだろう。君の貴重な時間を割いてもらいながら、君に満足な答えひとつ、返すことができないのだから」

生真面目な返答に、とくり、と胸が弾むのを感じる。

光の皇子と呼ばれる存在が、自分を真摯に見つめ、誠実であろうとしてくれている。

それだけのことが、なぜか嬉しい。

「……では、いつか」

思わず零した言葉は、シヲンの願いそのものだった。

「殿下の中の謎が解けた時、わたくしに教えていただけますか？」

ファナルシーズは、少し考えこんだ後――ひとつの条件とともに頷いた。

「君が、謎解きを手伝ってくれるなら……君は、わたしの知らないことを数多抱えこんでいるようだから、そのいくらかでも明かしてもらえれば、わたしは謎に近づけるかもしれない。……駄目、だろうか？」

上から押さえつけてもおかしくないところだが、皇子は礼を尽くし、尋ねてきた。

それは、次の機会を求める言葉だ。

目の前の輝かしき皇子と交流を持った場合、好ましからぬ騒ぎが周囲に生じる負要因には気づいたものの、それでもこの提案を退ける気にはなれず、シヲンは迷わず「喜んで」と応じた。

ファナルシーズが自らの謎を解くために、貪欲であるのと同様、彼もまた、それを解きたいと思ったのだ。

一度目の対面は、結果的にとはいえ、完全に秘匿された。

しかし、二度目はそうはいかず、彼――シヨンとファナルシーズとの縁は、目端の利く者には気取られる程度には、秘匿性に欠ける場が設けられ、三度目ともなれば、あからさまなものとなった。

つまり、光の皇子と呼ばれるファナルシーズには、この自分との関わりを、周囲に隠すつもりは皆目ないのだと悟らざるを得ず、シヨンは今更ながらに彼との縁を受け入れた決断を早い時期に悔いることとなったわけだ。

（せっかく、目立たぬように振る舞ってきたというのに……）

重い息をつきながら、神学院の回廊を歩いていたシヨンは、正面から近づいて来る一団の顔ぶれに気づき、そっと目を伏せた。

シヨルニョン侯爵家の次男にして、神学院においてはリーダーと目されるウァルシャーンとその取り巻きたちは、彼にとって最大の鬼門だった。

ウァルシャーン自身に、含むところはない。

大貴族の、しかし跡継ぎとは目されない環境で育ったウァルシャーンは、世間知らずなとこ

ろがあるものの、真っ直ぐな気性の、多少の距離さえあれば好ましく思える存在である。近しく付き合おうと思えないのは、彼の現実に即さない潔癖主義にあるのだが、人柄自体は、好感を以て認めている。

問題なのは、彼の人の良さにつけこむように、周囲に屯する者たちだ。

ウァルシャーンを旗頭にしようと思う者たちは、件の皇子との関わりが明らかになる内に、注目を集めてしまったシヲンのことを敵視するようになっていた。

柱神の養い子――という、御柱の加護を持たぬこの国にあっては、あまりに特殊で微妙な立場にあるシヲンを守るために、神殿上層部はその素性を隠してくれてはいたが、一挙手一投足に注目が集まる皇子殿下との交流が知られてしまっては、以前のような静かな日々は望むべくもない。

針のようないくつもの視線を受けながら、シヲンは立ち止まり、高位にある者に道を譲るべく一歩、退いた。

以前はさらに、床に膝をつき、恭しく相手の通り過ぎるのを待つのが常であったのだが、件の皇子に禁じられてしまったがゆえに、それはもうできない。

『卑屈に振る舞ってくれるな』

こちらの言い分などかけらも聞かずに、あの謎の塊でありながら、どこまでも皇族らしい皇

子は『命じる』のではなく『要請』してきたのだ。

自分が認める相手が、自分より劣る者に見下げられるなど許せない——という、傲慢で我が儘な言い分であれば、きっと即座に拒絶したことだろう。

だが、彼は親しい間柄であるシヨンが、何故に、不必要なまでに隠されているのかを見抜いた上で、そう主張したのだ。

長く、このアストニアには守護する柱神がいなかった。

広大な領土を誇り、その実力で国を治めてきた実績があるとはいえ、柱神の加護のあるなしは、あらゆる面で多大な影響を及ぼす。

柱神の加護が、絶対の約束ではない。だが、それが治世者を筆頭に、その地に住まう民の心に安寧をもたらすのは、確かな事実なのだ。

そして、まるでその渇望に応えたかのように、もたらされた——柱神の養い子である自分。

しかも、異能まで持って、精霊との意思の疎通さえたやすく行えるこの身——。

『オーダックをはじめ、なにがあろうと守り抜こうと思うだろうな』

澄まし顔で、シヨンの周囲の関係者に対する理解を示しながら、しかし直後、かの輝かしき皇子は盛大に顔を顰めた。

『しかし、それは、君の意思を無視した行いだ。少なくともわたしにはそう見える。わたしの

見方が穿ちすぎだと言うのなら、言って欲しい。黙ったままなら、わたしは自分の判断で、好き勝手にさせてもらうし、君の意思だというのなら、それは明らかに組織的な圧力を受けた結果、君が本来の判断能力を失したせいだと思わせてもらうし、恩ゆえに逆らえないというのなら、なるべく摩擦を生じさせない方向で、君の望みに則した方向に事態を誘導しよう』

つまりは、自分を無理に殺すな、ということだ。

シヲンがそうすることを、皇子は望まず、場合によっては口出しも手出しもすると、上に立つ者の傲慢さで言い切ったわけだ。

そこまで言われては、周囲の気遣いを言い訳にするわけにはいかない。

本当に、目立たぬこと、自身を世界から隠して生きていくことを望んでいたのであれば、あの皇子との縁を受け入れるはずもなかったのだから。

ファナルシーズの威を借ることなく、しかしその縁に恥じることのない態度を保ち、シヲンは真っ直ぐにすれ違う一団に対する。

明らかに、以前とは様子の違う彼に、ウァルシャーンは、ちらりと興味深げな一瞥を投げかけてきたが、それ以上の反応を示そうとはしなかった。

黙っていないのは、取り巻き連で、聞こえよがしに「殿下に気に入られたからって、いい気になって」やら「尊い方から目をかけられて、偉くなったつもりか」やらと、言葉を吐いた

が、意外なことに、以前のような不安や恐れを感じることはなく、その事実にシヲンは驚いた。

（ああ、そうか……）

どこかで、なにかが腑に落ちた。

目立つことを恐れ、人の視線を避けようとしたのは、彼らから向けられる眼差しと意思を恐れていたからだ。

恐れる相手からの言動は、些細なものであっても、棘となり、針となり、刃となり得、この身を傷つける。

だが、恐れを脱けてしまえば、それらは力を失うのだ——完全にではないけれど。

ファナルシーズによって開かれた鳥かごの外の世界は、思っていたほど恐ろしいものではなかった。心の有り様が、世界を変えることもあるのだと、教えられた瞬間だった。

知識とは、その大概が最初から頭の中の引き出しにしまわれているものであり、外部からの刺激でその引き出しが開くものだ——というのが、ファナルシーズの認識だった。

物心ついた時には、それが当たり前のことになっていたから、彼は不思議に思ったこともない。

皇子に相応しい教師をつけられ、その講義を初めて受けた時、すでにそれが納まっていることに気づいた彼は、しかしその知識と教師の解釈の違いに、興を覚えた。

知識と解釈とはまた別のものであると認識し、様々な解釈を集めるために、他者と語る機会を増やし、過去の人物の残した記録を調べた。

そんな彼にとっても、稀に、引き出しのなかにない情報に触れることがあり、それは純粋な歓びとともに、開閉自在の引き出しに納められることになった。

とはいえ、その数は非常に少なく、だからこそ彼にとって、そうした機会はなによりの楽しみであり、貪欲に求めるが故に、周囲からは勤勉だと見なされた。

新たな知識を求め、新たな解釈を求め——純粋な希求から始まった彼の行為は、対象を人間

にまで広げた時点で、彼の最強の剣と盾となった。

識るための、観察――その人物の行為ひとつひとつに宿る意味。解釈。

性格と合わせて考えれば、相手の思考や行動を先読みできることに気づき、不愉快な状況を改善するために、息をするより自然に、他者を動かすことを覚えた。

それが危険な力だと、彼は気づかず行使した。

自覚させてくれたのは、ひとつ年上の友人――。

だが、すでにそれは遅きに失した。

ファナルシーズにとっては当たり前のことが、周囲では決してそうではないことを、認識したその時には、彼の異常性――ひとは非凡性と言うのだが――は、すでに広く知られていた。

ため息が、零れる。

感嘆の言葉も賞賛の眼差しも、拒むつもりはなかったが、度を過ぎたそれらは、彼に自身の異端性をつきつけるからだ。

（せめて、もっと早くに気づけていたら……）

いつの間にか、狭まっていたこの檻に、囲いこまれることはなかったのだろうか、と。

3　記憶——それがある意味

出会って以来、ファナルシーズという存在は、シヲンにとっては興味深い、大いなる謎の化身だった。

年下であるにも拘わらず、彼の言動は常にシヲンより経験を積んだ年長者のものとしか思えぬものであり、時折、年相応の表情が窺い知れるものの、全体的に見て、かの皇子はありきたりな存在からはほど遠い、謎の塊だった。

その理由の一端を、シヲンが確信を持って摑んだと思った出来事は、出会って四年——彼が十七、ファナルシーズが十六の時に起こった。

きっかけは、些細なことだった。

「卑屈な態度は嫌いだ」

という、皇子の言葉に――脅しに、と言い換えてもいい――日々の態度を改めた結果、一部から猛烈な反感を向けられる一方、理解者と呼ぶべき存在を幾人か得ることが適って暫くしたころのことだった。

神学院の行事における、数人の学生による神詩朗唱の面子のひとりとして、シヲンが選ばれた時のこと――。

神詩とは、この世の天と地の間――空を支える柱神が世に残した、真理に関わるとされる詩歌全般を指し、その数は膨大である。

神学院の行事で、その尋常ならざる詩歌の中から、幾つかを選び、皆の前で朗唱することが許されるのは、学生の中でも優秀な者と定められており、そのひとりに選ばれたことは、シヲンにとっても誇らしいことだった。

だが、ここで困った事態が持ち上がった。

世界を創造した虹神七神がたたえる色彩の数と同じ、七つの詩歌が捧げられることとなっている行事において、選ばれた三人から四人の学生は、全色属性を網羅するために、最低ひとつからふたつの詩歌を朗唱すると決まっていた。

しかも、覚えやすく短いものを繰り返すのは非礼とされるため、過去五年に遡り、同じ詩歌

を用いることは禁じられている。

しかし、だ。……どうも、この五年ばかりの間、代表に選ばれた学生は、短く印象的なものばかりを選んだとみえて、重複しない詩歌は、結構……かなり長いものばかりとなっていた。

そうなると、短い詩歌ならひとりで二つ三つと受け持てるという条件は崩れる。

しかも、シヨンはこういう場面においては不器用で、気がついたら三つもの――因みに属性は、朱橙、蒼、紫だ――柱神が詠った詩歌の朗唱を押しつけられていた。

朱橙――は、いい。

養い親である柱神の属性だ。記述として残っておらずとも、かのひとが口にしたいくつかの詩歌は脳裏に刻まれている。

覚えているそれを口に乗せるのに不自由はない。

問題は、残るふたつの条件だった。

蒼属と紫属――その柱神が残した詩歌は、非常に数が少ない。

蒼属の御柱は、思いや印象を言葉に変換することを苦手としたがために。

紫属の柱神は、世に零れては害としかならない真実を隠すべく、沈黙を以て――。

その結果、この時点で、シヨンが行事で発表できる詩歌は皆無であり、そのまま時を進めれば、神学院の権威まで失墜しかねない事態となっていた。

そのことを、久しぶりに会ったファナルシーズに愚痴まじりに零したところ、輝かしき光の皇子は、こともなげにこう問いかけてきたのである。

「そんなに難しいものか？」

と――。

「難しいんです！」

と、応じれば、どこがどう難しいのか理解できないといった顔で、暫し黙りこんだ挙句、二つ三つ、記述に残されていない、だが確かに御柱たる人が詠ったと思しき、しかも短めの詩歌を口にした。

愕然とした。

いや、そんな言葉で片付けられるような衝撃ではなかった。

「なぜ……」

と、震える声で尋ねると、逆に困惑した様子で、暫し沈思した後、途方に暮れた顔で問い返してくれた。

「もしかして、これは一般的に知られていることではないのか？」

全然一般的ではありません――と、応えるのも億劫で、シヲンはため息をつきながら、縁を結んだ皇子の顔を凝視した。

世間知らず云々の問題では、もう済まされそうになかった。
目の前の皇子とは、一度、徹底的に膝をつき合わせて、話し合う必要があると――自覚した瞬間だった。

皇宮の庭を散策しながら、シヲンは背を抜かれて久しい、長身の皇子に問いかける。
「なぜ、ご存知だったのですか？」
無事、神詩朗唱を終えた数日後のことだ。
これまで発見されなかったふたつの神詩については、養い親たる柱神から教えてもらったことにしたため、詮索されることはなかったが、どうにも放置してはおけなかった。
あんな特殊な知識が、皇子のなかに眠っていることが、広く知られたら、いったいどれほどの騒ぎとなるか――考えるだけで頭が痛い。
皇子自身に、その特異さに対する認識がないからこそ、事態は深刻だった。
自然、詰め寄る目は真剣なものとなり、その理由がわからないらしいファナルシーズは困惑した様子で首を傾げた。

「普通……あるだろう？」

同意を求めるように問い返され、シヲンは何度もかぶりを振った。

主語が抜けている。

「なにがです？」

「知識や情報というものは、大抵頭の中を浚えば、見つかるものではないか」

蓄えた知識については、忘却することを知らぬ皇子の、何とも彼らしい言葉に、しかしシヲンは「いいえ」と答えた。

ファナルシーズが今、口にしているのが、学び、教えられて蓄えたそれ、を指しているわけではないことを知るからだ。

「普通、人間は教えられてもいないことを知ってはおりませんよ。推測することによって、先を知ることはあるでしょうが、知識が無から生じることも、もともとあるということも、考えられません」

もともと頭の中にあった——など、尚更あり得ない。

「だが、わたしは、そうとしか言いようのない状況にあるのだが？」

ここに自分という実例がある限り、あり得ないとは言えないだろうに——そう告げるファナルシーズに、シヲンはため息を洩らした。

それこそが異常なのだと、なぜこの聡い皇子が思い至らないのか——そのことが不思議だった。

（それとも……）

と、ひとつの可能性に気づき、暗然とする。

もしかしたら、認めたくないのだろうか、と。

現実から目を背けるのは、ファナルシーズらしくないことに思えた。特異であれなんであれ、事実を事実のままに受け入れるだけの器量を、目の前の皇子は持っているはずで、だからこそこの態度が腑に落ちない。

だが、このまま無自覚なままでいてもらっては困る。ファナルシーズの抱く知識の正体が、シヲンの想像通りのものであるならば、彼は望まぬ重荷を背負い込むことになりかねないのだから。

アストニアの後継として、常に高い理想と能力と結果を求め続けられ、応え続けてきた彼に、これ以上の荷を負わせたくはない。

求められるだけのものに、応えられる能力を持つ彼は、そのことに苦痛を覚えている様子は見せない。望まれるままに、彼は高みへと上る。

光の皇子と、最初に彼を呼んだのは誰であったのか。正に彼は光——人間ならざる光を抱

え、放ち、周囲を照らす存在である。
だが、その身は確かに人間なのだ。
押しつぶされることなく、上り続けた先で、彼が一体どうなってしまうのか——考えると恐ろしくなる。
人間ならざる領域に、足を踏み込むこととなっても、あるいは彼は何も思わないのかもしれない。
だが、自分がいやなのだ。
彼には人間でいてほしいのだ。
だから、枷をつけよう、とシヲンは思う——彼が人間たる身であり続けるように。
「……その知識が、どのような形で残っているのか、お尋ねしても宜しいでしょうか？」
「どのような形、ねえ……」
言葉を選ぶように、ファナルシーズが目を伏せる。
沈黙は、ほんの数瞬——。
輝かしき皇子は、そばに咲いていた白い薔薇にそっと手を伸ばした。
花心だけが淡い紫をたたえるそれは、明ける空の色に似ていることから、『薄明』と名付けられている。

「薄明……八世紀前、奇跡の指を持つ薔薇栽培家ロンダール・アギスによって生み出されたとされる薔薇。しかし実際にロンダールが生み出したものと、現在残っているものとには差異がある。なぜならロンダールは、ある女性の御柱に捧げるためだけに、この花を生み出したからだ。かの御柱の存在が儚くなると同時に、この薔薇は消滅すべく、ロンダール自身によって仕掛けが施されていた……しかし、かの御柱を慕う者たちは、彼女を偲ぶ縁として、この薔薇の命を長らえさせようとした。結果、薄明はその色彩のほとんどを失いながら、株としては生き残った。かつては、花全体が、淡く美しい紫をたたえていた……と、これぐらいか」

耳に心地よい声で、詠うようになされた説明に、半ば聞き惚れながら、シヲンは尋ねる。

「その、かつての『薄明』の姿を、ご存知ですか？」

「実物を知っているかと問われれば、否としか答えようがないが、頭の中に思い浮かべることができるかというのなら、是、だね」

やはり、とシヲンは息をつく。

「殿下」

花々が咲き誇る花園で、白い薔薇を慈しむように手を伸ばす優美な皇子の姿は、夢のように美しく、そのこの世界から乖離した光景に、シヲンは胸を締めつけられた。

「殿下は、認識を誤っておられます」

「……どういうことかな?」

聡明な彼とも思えぬ、不思議そうな表情で問いかけてくるファナルシーズに、シヲンは（やはり）と確信する。

（この方は、認めたくはないと思っていらっしゃる……）

その先に、どんな恐怖があるのかは、想像もできないが、それは確かなことに思えた。

「殿下が生まれながらにお持ちの知識や情報は、かつて殿下が別の生を歩んでいらした折の記憶に相違ございません」

言い切ると、彼は皇子をひたと見つめた。

意外なことを聞いた——というより、不快なことを聞かされたとでも言いたげに、顔を歪めた青年を。

「……馬鹿な」

低く呟くその声は、らしくもなく乱れていた……。



美しい女性が、春の花が咲き乱れる花園の中で、微笑み、夢の中の自分の名を呼ぶ。

「――――」

その名は、いつもと同じくこの耳に響きとしては残らない。

強い風が吹き、満開の花々のいくつかを散らす。

そのさまに、女性――いや、少女と大人の狭間にある、微妙な年頃である『彼女』は、拗ねたように頬を膨らませた。

「もう、〇〇たちったら！」

その幼さを感じさせる表情に、夢の中の自分が手を伸ばす。

バラ色の頬に触れ、彼女の濡れた唇に触れた薔薇の花びらを、すい、と指ですくい取る。

一瞬、驚きに目を瞠った彼女が、至上の紫の双眸を揺らした。

頬に触れる指先から伝わってくる――少しだけ高い、彼女の熱。

そうして彼女は、夢の中の自分の手を取ると、愛しげに自らの頬に戻した。

「――――」

囁く声には、微妙な熱がこめられている。
その響きに、夢の中ではない自分自身の胸が熱くなる。
「――――」
夢の中の自分が、彼女の名を口にする。
うっとりと、その声に、彼女は目を細める。
どくん、と胸が熱く高鳴る。
抱きしめたい。彼女の体を腕の中に閉じこめてしまいたい。彼女の熱を直接感じたい。
衝動とも呼べるものが、自身の中で暴れ出すが、夢の中の自分は、違う。
彼は、そんなものとは無縁であるのか、やさしく手を引き抜くと、子供をあやすように、彼女の銀の髪を指で梳いた。
「狡いわ」
彼女が、拗ねたように唇を尖らせ、夢の中の自分に訴えかけてくる。
「あなたはいつまでも、わたしを子供扱いするのね」
(そんなことはない)
必死の反論は、しかし夢の世界にあっては、決して相手に伝わらない。
「そんなことはないよ」

夢の中の自分も、同じ言葉を口にするのだが、その響きが同じであるとは思えない。
それ——の感情は、伝わって来ない上に、自分には、こんな様子の彼女を前にして、子供をあやすような態度は取れないとわかっているからだ。
自分なら——。
(わたしなら)
彼女に、そんな不満や不安を抱かせることはない。
力一杯に抱きしめ、彼女が逆に逃れたいと思うほどに、愛を囁き、誓うだろう。
そのバラ色の頬といわず額といわず唇といわず——彼女の全身に、思いの丈をこめた口づけを贈り、その証を残さずにはいられないだろう。
夢の中の自分が、なぜそうしないのか、それこそがわからない。
だからこそ、思うのだ——自分と『夢の中の自分』とは違う存在なのだと。
そうして、同時に思い知らされる——彼女は、夢の中の自分のそばにこそ、いるのだと。
その意味するところは……。
気づきたくない事実だからこそ、目を背けてきた。
だが、それは親しい友人によって、すでに暴かれた。
愛しいひとの夢を見ながら、絶望にきりきりと胸を締めつけられながら。

ファナルシーズの意識は、現世へと引き戻された。

◈　◈　◈

やはり、今宵も月は美しく、さえざえとした光で夜空と地上を照らし出していた。
窓から見える銀の輝きに、陶然と見惚れながら、ファナルシーズは切ない吐息を洩らす。
美しい月は、夢の中でしか会えない、美しい彼女を思わせる。
初めて、夢の中で見いだして以来、ずっと心囚らわれつづけてきた彼女を。
けれど、あれはあくまで夢――。
もう、自分は夢から覚めなければならない。
ひとつ年上の友人が、願望という名の魔法を解いてしまったから。

◈　◈　◈

『殿下が生まれながらにお持ちの知識や情報は、かつて殿下が別の生を歩んでいらした折の記憶に相違ございません』

◇◇◇

あの迷いのない一言が、どれほどこの心に絶望をもたらしたか、あの友人にはわかるまい。
夢の中に『自分』がいることを知りながら、感情の共鳴を持たなかったがゆえに、蜘蛛の糸ほどに細い希望を紡ぎ続けたこの心を、あの友人が理解してくれる日は来るのだろうか。
友人は、夢を介して真実を見抜く異能を持つ。
夢という、現と常世の狭間の世界を駆けることで、あの友人は真理を見抜く。
だからこそ……知っていたからこそ、自分は己が見る夢のことを、彼には告げたことがなかった。
薄々ながら、気づいていたからこそ——それが事実だと、突きつけられたくはなかったのだ。
だが、最早、目を逸らすことはかなわない。
「貴女……」
麗しい月の化身——月光そのもののような、輝かしき髪を持つ、自分にとって至上の女神。
「貴女は……」

認めることを決めたというのに、それでも、口にするには相当な努力が要った。

「……過ぎ去った時の中にしか、存在しない方なのですね……」

絶望を噛みしめながら、ファナルシーズは幼い頃より、胸の中で育て続けてきた、唯一にして至純の恋と決別した――。

4　月影は、追わない

十八になるのを待たず、神学院における必要単位を取得したシヲンは、朱橙神神殿の籍を手に入れた。

用意されたのは、第四位神官籍――高すぎず、低すぎず、それなりの人脈を持つ神学院卒業生としては妥当な地位だった。

ファナルシーズの意向と、シヲン自身の意思もあり、神殿が過剰なまでに彼を囲い込む動きをすることはなかったが、それでもかなり神殿側の――というか、義父であるマナレド・オーダックの要望が反映された結果ではあった。

神殿に入ったシヲンは、学生時代は秘められていたあらゆる事実を、身を守る武器のごとく披露された。

朱橙属の柱神の養い子であったこと、そのかけがえのない時期に、神たる身から直接、人間の世では望み得ぬほどの知識と真理を授けられたこと――。

神籍を、いずれは与えられるだろうとは、誰も口の端にも乗せはしなかったが、しかし事情を聞いた周囲がそれを期待することを止めようとも、神殿はしなかった。

ある意味、それが自分の持つ価値であることは、シヲン自身自覚しており、いずれはと覚悟も決めていたため、動揺することはなかった。

ただ、学生の頃に比べ、神官としての日々が、格段に忙しくなったことには驚かされた。

同じ朱橙神神殿に籍を持つ神官同士の交流、他神殿の人間との意見の交換、一般信者にもわかりやすい神の教えの話し方の研究……などなど。

新米神官に回ってくる仕事は、実に多種多様で、しかも体力気力ともに非常に必要とするものばかりだった。

とはいえ、神殿側が最初に思い描いていた、真綿でくるむような——挙句に、こちらの意思などお構いなしに、御輿に乗せてしまおうという——扱いよりは余程にましに思えたから、シヲンは文句も言わず、その忙しい日々を消化した。

そんな日々を送る中で、唯一心にかかるのは、自分が神殿籍を与えられたのとほぼ同時に、恐らくは未来のアストニアの治世者として相応しいか否かを判ずるべく、皇帝ガーランス五世によって、地方にて起こった反乱の鎮圧責任者に任じられた第四皇子ファナルシーズのことだった。

皇宮の花園で、思い切って踏み込んだ一言を口にして以来、彼とは会っていない。

シヨンの神官就任と、ファナルシーズが鎮圧責任者に任じられたのがほぼ同時であったからではあるのだが……時だけが、無情に流れている。

踏み込み過ぎたかという悔いと、その結果、彼から向けられるかもしれない拒絶を恐れる気持ちもあって、こちらから会おうとはしなかったのだが、ちりちりと胸を焦がす思いは日々強まるばかりだ。

脳裏に浮かぶのは、最後に会った彼の呆然とした顔だった。

『馬鹿な……』

と、掠れた声で呟いた、あの時の彼の顔——。

痛みを堪えるような、苦しげな様子を思い出すと、罪悪感に胸が締めつけられる。

良かれと思って告げたことだが、自分の言葉は確かにファナルシーズを苦しめたのだ。その事実が、棘となって心を苛む。

ふう、と思わず息をついた時のことだ。

「物思いに耽っているところ悪いが、シヨン・オーダック」

かけられた声に振り向くと、同じ第四位神官であるウァルシャーンが立っていた。

同時期に神殿に入ったとはいえ、シヨルニョン侯爵家の子息である彼は、蒼神神殿に属して

おり、あまり顔を合わせることはない。
だから、このように声をかけられるのは珍しいことだった。
「何か、ご用ですか？」
遜るわけではないが、身についてしまった丁寧な言葉遣いに、ウァルシャーンは少しばかり顔を顰めたものの、すぐに仕方なさそうに肩をすくめた。
「オーダック祠祭がお呼びらしいぞ。君が見つからないと、遣いの者が慌てていた」
「マナレドさまが……？」
呼び出される心当たりはなかったが、急いで行くべきだろうと判断し、彼は椅子から立ち上がった。
図書館の第二閲覧室には、他に人影がない。
「お手数をおかけしましたようで……」
小さく頭を下げると、ウァルシャーンは盛大に顔を顰めた。
「以前のように卑屈には感じないから許せるが、せめてもう少しは砕けた言葉遣いを心がけてはどうだ、シヲン・オーダック？　一線を引かれたようで近づきがたいと不評だぞ。隙のひとつぐらい見せる愛嬌はあったほうがいい」
他の者が口にしたのなら、皮肉と思ったろう――「皆が言っている」というのは、数を頼っ

て自らの正当性を主張したがる人間がよく口にすることだからだ。
しかし、ウァルシャーンに限ってはそれはないのだと、シヲンは知っている。
学生時代、目立たぬよう、殊更慎重に控えめに行動することを止めたあと、ウァルシャーンは好意を持って、歩み寄ってきた数少ない友人のひとりなのだから。
「わかった……気をつける」
そう答えて、シヲンは歩き出した。

「お断りいたします」
きっぱりと、シヲンは言い切った。
呼び出された神殿の一室で、義父から聞かされた要請は、到底うなずくことのできぬものであったのだ。
「シヲン」
「何と言われましても、できません。わたくしは占者でも巫史でもありません。ひとの心や運命に干渉することは許されません」

それは、シヲンが養い親である柱神と交わした約束でもあった。
彼の異能――夢を駆け、夢に融け、夢を掬う力は、あまりにも容易くひとの運命を左右できるものであるがゆえに。
「だが、かの方は個人ではいらっしゃらない。この国の運命とも深く繋がっていらっしゃる……国の行く末を見極めるためには――」
「何と仰っても、できかねます。確かに殿下はこの国の未来に欠かせぬ御方でありましょう。ですが、殿下はその前に、ひとりの人間であらせられます。その方の心を覗くのも未来を視るのも、運命への干渉に他なりません」
絶対に、引き受けることはできません――。
揺らぐことなき決意をたたえ、シヲンは断言した。
そう……できるはずがない。
夢視でファナルシーズに関わることなど――。
夢視という異能を持つシヲンに、朱橙神神殿最高祠祭マナレド・オーダックが要請という形で命じたのは、第四皇子ファナルシーズの、夢を介しての未来視。
これまで外れたことのない、シヲンの能力を見込んでの――。
だが、そんなことをするわけにはいかないのだ。自分の異能による【夢視】は、単なる可能

性の示唆では終わらない。確定的ななにがしかを、彼にもたらしてしまうのだ。
ただでさえ、多くのものを背負っているあの皇子に、これ以上の枷はつけさせたくない。
自分がその手伝いをするなど、とんでもない。
断じて受け入れられない。
そう思うのに、苦渋を面に出した義父は、それをシヲンに強いるのだ。
「……これは、陛下の命なのだ」
「だからと言って……」
反駁しかけるシヲンを押しとどめ、義父は先手を打ってきた。
「皇室付きの巫史も占者も、殿下の未来を読み解くことがかなわぬらしい……」
それゆえに、陛下は不安を覚えておいでなのだ——。
頼みの綱となるのは、お前しかいないのだ——切々と訴えかけられ、シヲンは義父の立場上、断れなかった流れを読み取った。
しかし、だからと言って、答えを翻すことはできない。
個人の運命に関わる夢視をしないことは、養い親との約束。
その理由も教えられているから——特に、ファナルシーズを対象に為すことはできない。
養父である柱神は告げた。

『お前は、お前の夢視が、乱れた麻の糸束の一筋だけを、不動の流れと定める力を持つことを自覚しなければならないよ』

それは、無数の可能性を持つ未来を、彼が『夢視』ることによって、固定するということ。

朱橙属の柱神は、こうも続けた。

『対象が抽象的なものならば、その力も不安定に散らばることもあるだろう。土地や国という大きな対象であれば、雁字搦めに縛りつけることもなかろう……だが』

その後に、告げられた言葉は、決して解けぬ呪縛となって、シヲンの心を締め上げた。

『個人の運命を、お前は決して【夢視】てはならない。お前が【夢視】ることによって、その人間の未来は確定してしまうのだからね』

今、マナレドの口を介して、皇帝から命じられていることこそが、その絶対の禁忌だった。

皇室が抱える占者も巫史も見通すことができずにいるという、ファナルシーズの未来――それを自分が決定する？

冗談ではない。

絶対にこの身に許すことのできぬことだ。

「……義父上……」

呻くように、シヲンは告げた。

「わたくしは、幼きころ、育ててくださった至高の方から、この力のことをこう言い聞かされました……この身が持つ夢視の力は、本来流動的であるはずの流れさえ、定めてしまう拘束力に溢れたものだと。占者や巫史が見通すことのかなわぬあの方の未来を、最悪なものへと定める可能性があることを、どう思われます？　わたくしの望むと望まざるとに拘わらず、夢に立ち入れば、それは決定してしまうのです……そんな、恐ろしいことを、わたくしは、たとえ殺されたとしても、したくはありません」

蒼白になって訴えるシヲンの様子に、義父もその言葉の真実を読み取ったのだろう。

その日は、解放された。

しかし、完全に諦めてもらえたわけではなかった。

十日後、再び義父に呼び出されたシヲンは、少しだけ対象を変えた【夢視】を、今度は絶対にと命じられてしまったのである。

【夢視】る対象は、アストニア皇国――。

その、近い未来。

それは、どこまでもファナルシーズと重なるものではあったけれど、彼個人のそれとは言い切れないが故に、シヲンは断ることができなかった――。

寝台に横たわりながら、シヲンは意識を集中した。
求めるものを、明確に意識に焼き付け、目を閉じると同時に、水に潜るが如く、夢に潜る。
そこに見えるのは、光の流れ。
川ではない。
乱麻のごとく、もつれあい、どこかへと繋がっていく――現と常世と過去と未来と。
あらゆる事象がからみあい、先に繋がっていく……『流れ』としか呼びようのないもの。
選び損ねたら、なにも見いだすことはできない。
見たい流れを、しかしシヲンは間違えはしないし、見誤ることもない。
（求めるのは、アストニアの近しき未来……）
意識を澄ませれば、その一筋ははっきりと見て取れる。
乱れもつれた光の糸の中、ひとつだけ明らかに他とは違う輝きを放つそれを見つけることができる。
（これだ）

確信とともに、シヲンは誤たず、それに手を伸ばす。
触れる。
同時に、それが――その先に待つ未来が、光景が、彼の脳裏に映し出された。
戦があったと思しき土地に、立てられるのはアストニアの国旗。
勝利に興奮した兵士たちが、高らかに叫んでいる。
『万歳！』
『皇子殿下万歳！』
『ファナルシーズ殿下！』
熱狂的な空気の中心にいるのは、純白の衣装に身を包んだ――見知った青年。
王冠のごとき輝く金糸の髪を、風に靡かせ、一身に兵士たちの心と忠誠を集めたるただひとりのひと。
（よかった……）
夢の中ながら――否、自身が見る夢が持つ力を知るが故に、シヲンは安堵の息をつく。
（よかった……彼は、無事に乗り切る……）
それは、地方における反乱が、ファナルシーズの手腕によって鎮静化されるということだ。
他ならぬ自分の夢がそれを告げる限り、これは揺らぐことなき、絶対のファナルシーズの未

来である。

（よかった……）

もう一度、そう思った時、視界がぐらりと揺れた。

それは、激しい水の流れに呑み込まれたかのような衝撃――気がつけば、シヨンの視界には、違う場面が映し出されていた。

なにかに引き寄せられるかのように、意識が、見慣れた皇宮の、しかし見たこともない場所に引っ張られた。

こんなことは初めてで、困惑していると、突然赤子の泣き叫ぶ――否、産声が聞こえた。

その空間全体が、歓喜の渦に包まれる。

誰かが、大声で触れ回っている。

『ご誕生！　殿下がご子息、陛下のお孫殿下がお生まれになられた！』

『玉のようなお子様です！』

『万歳、アストニア万歳！』

（誰のお子様だって……？）

シヨンは、夢の流れを彷徨いながら、軽い混乱を覚えていた。

夢は、あまりにも多くの要素を含むがゆえに、望むものばかりを見せてはくれない。

彼が見たいと意識したのは、アストニアの未来だ。そして、地方の反乱を治めたと思しきファナルシーズの姿を目にした。

だから、これはその続きだと、思ってしまえばいいのだろうが……なんとはなし、引っかかるものがある。

（なにが……）

引っかかるのか、わからないままに、彼は夢を視続ける。

皇宮の一室で、金髪の愛らしい赤子を抱いて、幸せそうに微笑む若い女性がいた。

見たことのない女性だった。

そして、その傍らで、笑みに目を細め、その赤子を見つめているのは――。

（殿下……）

「ありがとう」

優しく、ファナルシーズが女性に声をかける。

女性は嬉しそうに頬を染め、「いいえ」とかぶりを振る。

間違いない、これは確かに未来の光景なのだ。

（よかった……）

心から、シヲンはそう思った。

ファナルシーズは幸せになる。
この女性を得て、跡継ぎとなる子供を得て――翳りのない、明るい未来を、彼は歩いていくのだ。
（本当に、よかった）
そう思い、もう一度ファナルシーズの喜ぶ顔に目を向け、その瞬間、シヲンははっと息を呑んだ。
明確に、なにがどうとは言い切れない、だが無視できぬ違和感を覚える。
ファナルシーズの女性に向ける眼差し――そこには、あるべき感情の色がなかった。
優しさと慈しみの色は見いだせるものの。
恋う色だけが、そこにはなかったのだ……。

5　静かに過ぎゆく時

シヲンの【夢視】の通り、アストニアは輝かしき時を享受しつづける。
地方における反乱を、見事に治めたファナルシーズは、その一年後、立太式を迎え、さらにその二年後、隣国ウルクシュナから、第二王女ユーランディアを妻に迎えた。
ユーランディアは、シヲンが夢で視た、赤子を胸に抱いていたあの女性だった。
絶世の、と呼ぶのは大げさだが、充分に人目を引く美女であり、なによりその聡明さがファナルシーズに相応しい、と周囲を納得させる人物だった。
彼女と何度か言葉を交わすことで、シヲンはファナルシーズの幸福な未来を確信した。
だから、久方ぶりにふたりで話す機会があった際、彼は皇太子にこう告げたのだ。
「素晴らしい奥方ですね」
と。
ファナルシーズは穏やかに「ああ」とうなずいた。

「申し分ない女性だと思うよ」
皮肉の翳りもない口調だったにも拘わらず、素直に受け取れない響きが、そこには宿っているような気がして、シヲンは微かに眉宇をひそめた。
そんな彼の様子に気づいたのだろう、皇太子は小さく苦笑した。
「気に入らないという顔をしているね」
「そういうわけでは……」
ない、と続けるより先に、ファナルシーズが口にした言葉に、目を瞠る。
「母上も、そのような顔をなさっていたよ」
「皇后陛下が、ですか？」
思わず問いかけた彼に、皇太子は「ああ」とうなずいた。
「愛しい女性を得た幸福を嚙みしめているような顔ではない、とはっきり仰ってね。ご自分が父上と熱烈に愛し合っておられるものだから、そう見えないわたしのことが、心配らしい……いや、心配なさってるのは、ユーランディアのことかな」
なにを、とは尋ねるまでもないことだった。
「……神官たるわたくしが」
言うことでは——と続けようとした時のことだ。

「わたし」

と、ファナルシーズによって遮られた。

「は？」

思わず首を傾げたシヲンに、光の化身のような青年は、咎めるような目を向けて、こう続けた。

「君には以前、双方の立場や地位がどう変わろうと、公の席以外では、態度を改めないで欲しいと頼んだはずだ。ここは公式の場ではない。以前の君は、自分のことを、わたくし、などとは言っていなかったよ」

なんと、些細なことに拘るひとなのか——呆れかけたシヲンは、しかしすぐにそうではないと気がついた。

正式に皇太子となったことで、周囲は確実に、ファナルシーズへの態度を変えたのに違いない——単なる皇子と皇太子とでは、あまりにも立場が違いすぎる。

そんな周囲に不満を零すことなど、彼がしたとも思えないが、開いた距離感に、多少の寂しさを覚えたのは確かだろう。

思わず、謝りかけ、しかしそれも違うだろうと思い直し、数瞬逡巡した後、シヲンは一人称だけを以前のそれに戻して、改めて言いたいことを口にした。

「……神官たるわたしが言うことではないのでしょうが、幸福な関係を保つためには、互いに努力する必要はあるかと存じます」

「言われるまでもないな。彼女の美点は認めているし、彼女に心痛を与えるような言動も取っていないつもりだよ。わたしたちは、互いを尊重し合っている。それ以上を求められても困ってしまうね」

淡々(たんたん)とした声で、ファナルシーズは答える。

彼が本気でそう言っているのがわかるだけに、シヲンは皇后の抱く不安を理解できてしまった。

恋愛だけが、すべてではない。

特に、ともに国を支える者同士であれば、それ以上に必要なものは多いだろう。

だが、恋愛は時に嵐のごとく、人間の心を翻弄(ほんろう)する。

皇后ワルルーシアは、息子である皇太子が、いつかユーランディア以外の女性に、そんな激情を覚えることを危惧(きぐ)しているのだろう。

そのことを伝えると、ファナルシーズはくっと口元を歪(ゆが)めて答えた。

「あり得ない」

常(つね)の彼らしからぬ、歪みを孕(はら)んだ笑みだった。

「殿下？」
「わたしが恋に惑うことはあり得ない」
なぜなら――と、凄絶に笑いながら、皇太子は続けた。
「わたしの恋する唯一のひとは、この世にはいないのだから――」
どういう意味かと、首を傾げたシヲンに、光の皇太子は苦い笑みを洩らし、答えと思しきものを放り投げてきた。
「君が、言ったのだろう……わたしの知るすべてのことは、前世の記憶だ、と」
月の影を追うほどに、わたしは一途にはなれないよ。
哀しげに、ファナルシーズが呟いた。
聞く者の胸を突く、切ない響きに満ちた声だった――。

（そうだったのか）
ようやく得心が行った。
数年前の、ファナルシーズの態度を、思い出しながら、シヲンは思った。

頑なまでに、生まれ持っていた『知識』や『情報』の意味から目を背けようとしていた皇太子……彼ほどの明晰な頭脳の持ち主であれば、それが前世の記憶であることに——たとえそれがどれほど稀有なことであろうとも——気づかねばおかしいと思っていた。

なのに、彼は決してそこに意識を向けようとはしなかった。

シヲンが指摘した時ですら、「馬鹿な」と一蹴しようとした。

その理由は、ただひとつの恋だったのだ。

生まれながらに持った情報のなかの女性に、恐らく彼は恋していたのだ。だから、それが『過去の記憶』であってはいけなかったのだ。それを認めることは、相手がすでにこの世のひとでないことを受け入れる行為に他ならないのだから。

自分の言葉は、さぞ恨めしかったことだろう——今更ながら、シヲンはそう気づいた。そして、そんな態度を欠片も見せなかったファナルシーズを、さすがだと思う一方で、その強さに寂しさを覚えた。

自分が同じことを経験したら、逆恨みだとわかっていても、それでも思いを振り切ることはできないだろうと思ったのだ。

だが、一方で、シヲンは自分の行為が間違ってはいなかったのだとも思った。

ファナルシーズが、穏やかに見えて、苛烈な気性を隠し持っていることを、シヲンは以前か

ら気づいていた。

地方での反乱を鎮圧した際の、首謀者に対する厳しすぎるほどの処断で、それをかいま見た者もいただろう。

守るべき民を盾に、卑怯にも逃げ出した首謀者たちを、彼は盾とされた民たちの前で処刑した。

彼らの亡骸に、石を投じる人々を、罰することもなかったと聞く。

そんな彼にとって、醒めない恋など、毒に等しいではないか。

どこかにいるかもしれないと、一筋の希望を捨てきれず、生涯一度の恋を貫くなど、許されぬ立場にある彼を傷つけ、追い詰める刃としかなり得ない。

（これで、よかったのだ……）

自分自身に言い聞かせながら、シヲンは【夢視】のなかで見た、ファナルシーズの瞳を思い出した。

穏やかな笑顔、輝かしき光を纏いながら……けれど恋う光だけが欠如した、あの眼差し。

つきり、と胸が痛んだが、それはシヲンにはどうしようもないことだった――。

蜜の中の蜜。
最高の蜜。
蜜の女神。
そう呼ばれるヴィッシャーナの、人生最高の幸福と、最低の不幸を、同時に呼び寄せた存在は、ただひとりの男性だった。
極上の蜂蜜を思わせる髪と肌と瞳、見る者にその甘さを想像させる蠱惑的な唇――蜜の化身としか呼びようのない容姿に恵まれた彼女は、その魅力ゆえに、幼い頃から邪なる意図を持つ者たちから狙われ続けてきた。
豊かとは言い難い実家において、最初に彼女の脅威となったのは、両親だった。
彼女の器量に目をつけた、艶福家に売りつけられる寸前に、彼女が逃げ出せたのは、兄弟達のおかげだった。
下町に逃れたものの、雨に打たれて熱で動けなくなったとき、廃屋に勝手に住みこんでいる老婆に拾われた。

魔女だと名乗る老婆のもとで、手伝いながら、知識を積んで、彼女が亡くなるころには、同じぐらいのことができるほどの知識と経験を積んでいた。

だから、老婆の死を隠して、死んだのは転がり込んできた娘のほうだと誤魔化して、老婆の襤褸を纏って、そのふりをした。

だが、ヴィッシャーナは、それを貫き通すには経験が足りなさすぎた。

訪れた客の要望に応えられる薬はないと告げた時、激高した男の暴力から思わず身を守ろうとして露になった腕は、瑞々しい乙女のそれであり、客もすぐにそのことに気づいたのだ。

襤褸を剝ぎ取られ、光の下、晒されたのは黄金の化身。

邪な想いで、他人の妻を奪う手段を求めて魔女の家を訪れた男は、そこで見いだしたヴィッシャーナを力ずくで支配しようとした。

抵抗すると、血が出るまで殴られた。

殴られすぎて、頭がぼうっとしたけれど……誰か、と助けを求めることは止められなかった。

誰か、誰か、誰か、誰か……ああ、誰か。

助けて、と。

◇◇◇

目が覚めた時、見えたのは知らない部屋だった。
身を包むのは、これまで想像もしたことのない柔らかい寝具、優しすぎる肌触りに、現実だとは思えなくて居心地悪くさえ感じた。
こんな優しさは、知らない。
こんな優しさが現実にあるだなんて信じられない。
そう思ったから、目覚めても、しばらくの間、身動きひとつできなかった。
そんな呪縛から、解き放ってくれたのは、遠慮がちに部屋の扉を開け、顔を覗かせた青年だった。
栗色の、柔らかそうな巻き毛と、少し垂れ気味の目が、なんとも言えない愛嬌を醸し出す、不思議な空気を纏うそのひとは、ヴィッシャーナが目覚めていることにすぐに気づいて声をかけてきた。
「大丈夫？」
自分より、確実に年上と見えるのに、その不器用というか要領を得ない問いかけはどうなのかと、思わないでもなかったけれど、朴訥とした態度と声音に、抱えていた緊張が融けて、な

ぜか素直に頷いていた。

「あなたが――」

助けてくれたの？

尋ねるというより、確認するつもりでかけた言葉に、しかし青年は「いいや」とかぶりを振った。

「この子だよ」

君を助けて欲しいと言ったのは。

意味不明な言葉とともに、示されたのは、彼から手渡された銀色の鎖。

小指の爪ほどの大きさの、若草色の石がひとつだけついた、長さから察するに、首飾りと思しき装飾品――。

綺麗な若草色の輝きに、目を奪われたけれど、それを「この子」呼ばわりする青年は、どこかおかしなひととしか思えなくて、困惑した。

けれど、それは、彼が近づき、それ、を自分の手に落とすまでのことだった。

一瞬にして、わかった――理解などではない、するりと青年の言葉が、全身に染み渡ったのだ。

確かに、青年の言うとおりだった。

『この子』なら、自分の危機を感じ取り、力ある誰かを呼び寄せ、助力を求めただろう。『この子』にはそれだけの力があり、そうして『この子』がそれだけのことをする理由が、自分にはあるのだから。

単なる装身具などではないのだから……『この子』は。

「……ありがとう……」

心を鎧うことに慣れたヴィッシャーナとしては、非常に珍しいことに、素直に感謝する気持ちになっていた。

そうして、心を素直にしたら、触れた部分から、何かが伝わってきて、それはすとんと、いつの間にか彼女の心の中心に納まっていた。

「そうか……お前、春嵐っていうんだね……」

「すごい」

と、そこで、蚊帳の外に置かれていた格好の青年が声を上げた。

「触れただけで、そこまで感じ取れるんだ」

青年の意外そうな反応こそが、かえって心外なものに思えて、「なにをいまさら」と目を向けて——。

その瞬間、ヴィッシャーナは心を囚らわれた。

その時初めて、彼女は彼の顔――否、彼の存在を正面から受け止めたのだ。そうして、その結果、ようやく……初めて、彼が、彼女が当たり前に接してきたひとたちとは全然違う、全く種類の違う存在であることに気がついたのだ。

（うそ……）

としか、思えなかった。

彼の顔、彼の声、彼の存在そのもの――。

そこに意識を向けてしまえば、もう逃れようがないほどの引力に囚らわれてしまう。

彼ほど美しい存在を、知らない。

彼ほど魅力溢れる存在を、知らない。

彼ほど自分を魅了する存在を、知らない。

きっと、未来永劫、彼ほどに自分を縛る存在を……知ることは、ない。

確信、した。

それだけ、彼は特別で稀有な存在だった。

彼と繋がりたい――彼を手に入れたい。

魂の奥底から、そんな、願いと呼ぶには生々しい欲望が湧き上がる。

欲しい。

どうしても、手に入れたい。
そう思った瞬間、手にしたばかりの半身が……神宝『春嵐』が、答えを教えてくれた。
するり、と彼の首に腕を巻きつける。
（大丈夫）
確信しながら、ヴィッシャーナは青年と見える柱神の耳元で、決して相手が拒めぬ願いを口にした。
この先、長き……長すぎる生を受け入れる覚悟を決める上で、年少者は、人間の世との決別と、神たる存在への変異を受け入れるために、そうなるための儀式の相手を選ぶ権利を持ち得るのだ。
その相手に、ヴィッシャーナは自分を救い、囚らえた青年の姿をした柱神を選んだ。
あなたがいい――ですら、ない。
貴方しか要らない――という意思を込めて。
彼女の願いは叶えられた。
けれど、その想いが彼に伝わることはなかった。
なぜなら、彼の心は、ヴィッシャーナに出会う以前に、別の存在に囚らわれてしまっていたからだ。

彼の心は、孤高（ここう）の雪姫の存在に、雁字搦（がんじがら）めに縛られて、いた。
そのひとの名は、フィオルシェーナという……。

6　影と現が交錯する

気づいた時、シヨンは懐かしい庭に立っていた。
十になるまで住んでいた、柱神の屋敷のそれ――。
（ああ、夢だ……）
事態を正確に把握し、彼は背後を振り返った。
そう、これは夢――だが、【夢視】という異能を持つ自分にとっては、夢もまた現実であり、ここに呼ばれた意味は、ひとつしかないとわかっていた。
「ナセルティーノさま……」
夢で養い子を呼び寄せた、朱橙属の柱神は、穏やかな、しかし少しだけ淋しげな笑顔でシヨンを見つめていた。
「もう父様とは呼んでくれないのかな？」
問う声に、拗ねた響きを感じ取り、シヨンは思わず苦笑した。

「この年で、貴方のことをそう呼ぶのは、さすがに抵抗を覚えます」

父上――と、呼んでもいいのだが、目の前の、外見だけはすでに年下にしか見えない、二十歳前後の青年に呼びかけるには、違和感が大きすぎる。

「そんな無意味な抵抗感、覚えなくていいのに」

すでに数世紀を生きているはずだというのに、どことなく子供っぽさの残る言動は、あるいはその外見のせいかもしれない。

正真正銘の子供であった頃は気づかなかったが、ナセルティーノは時折、本当の子供のような顔をするのだ。

「無意味かどうかは、わたしが決めます。それで、この度のお招きは、いったい……？　まさか、そう呼ばせるのが目的ではございませんでしょう？」

シヨン・オーダックとなってから、養い親から夢で招かれたのは、ただ一度だけだった。

それは、彼が病に倒れ、苦しみのあまり、肉体から魂が抜け出した時のこと――魂を保護するために、一度だけこの屋敷に呼び戻された。

それ以降、一度として、ナセルティーノがシヨンに接触してきたことはない。

人間として生きている自分のことを思ってのことだと、わかっているだけに、シヨンは緊張を覚えずにはいられない。

そして、その推測は的外れなものではなかった。

ふう、とひとつ息を洩らし、ナセルティーノが気が進まぬ様子で口を開いた。

「近いうちに、紫属と朱橙属に空席ができる……わたしとしては、お前には人間として生きて欲しいのだが、生憎選ばれるのは紫属は一位さま、朱橙属では今の二位さまだ。その可能性があることだけは、心に留めておいて欲しい」

思いもよらぬ重大な告白に、シヲンは大きく目を瞠った。

「おふたりも……ですか？」

空席ができる――それは、御柱たる柱神の寿命が尽き、天に召されるということだ。

千年もの時を生きる柱神は、その長き時間ゆえに、相次いで亡くなるということはまずないと聞いた覚えがある。

しかも、次の柱神を選ぶのは、紫属の一位――最長老だという。最も長く生きている一位ではなく、年若い柱神が寿命を迎えるとは……聞いたことがない。

「珍しくはあるが、全くないことではないよ。特に紫属の方々はね……我らには想像もつかぬ力を与えられておいでだから……決して心弱い方ではなかったのだけれど……」

ふ、と遠い目をするナセルティーノは、近いうちに命を落とすという紫属の柱神のことを知っているのだろう。

不意に、かつて彼から聞いた話を思い出した。

『あらゆる忘却を拒むなど、辛いだけの選択であろうに……なのに、あの方は……』

哀しげに、遠くを見つめてそう呟いた養い親――。

もしかしたら、あの時彼が見つめていたひとの命が尽きようとしているのだろうか……？

知りたい、と思う一方で、立ち入ってはならないような気もして、結局シヲンは別の話題を選んだ。

「……わかりました。それで、その話は、わたしだけが心に留めておけば良いことなのでしょうか？　それとも、我が光の皇子にも伝えるべきでしょうか？」

ぴくり、とナセルティーノの肩が震えた。

しかし、数世紀を生きている神の一員は、綺麗に動揺を隠して白を切る。

「光の……？　ああ、アストニアの皇太子殿下のことだね。なぜ、ここに彼の話が出てくるのか、わからないけれど、話しておきたいのは、お前だけだよ」

わからないと言いながら、養い親は、その理由を尋ねようとはしなかった。

そのことこそが、シヲンに答えを確信させるのだと、彼は本当に気づかないのだろうか？

否。

そうではあるまいと、シヲンは思った。

そこに思い至れるほどの、余裕がないのだ――恐らくは。
それほどに、ナセルティーノを動揺させる、ファナルシーズという存在――。
その意味――理由は、恐らく……。
「それは――かの方が、かつて御柱の君としての生を全うされたから、ですか？」
確信を胸に問いかけると、朱橙属の柱神は、今度こそ、隠しようのない動揺を瞳に宿し、動きを止めた。

「やはり、そうなのですね」
確信とともに、シヲンは呟いた。
前例がないことも、聞いたことがない事例であったことも、最早何の言い訳にもなりはしない。
ファナルシーズと関わり、その特異な存在のあり方に興味を抱いた瞬間から、その可能性はシヲンの中から消えることなく存在しつづけたのだ。
前世の記憶を持ったまま、生まれ変わるなど、まずあり得ない。

しかし、ファナルシーズはまさに、その奇跡を具現した人物だった。
それでも、彼は、なかなかそのことを認めようとはしなかった。
夢でしか会えない、恋するひとが、この現に生きていようはずがないことを、認めたくないがゆえに。
けれど、そんなこととは露とも知らぬ自分の一言で、かの人は過去と決別し、それと同時に頑なまでのこだわりを捨て去った。
生まれ持った知識の内の、一体どれだけが経験した記憶によるものなのか、望んで得たそれなのか。
見極めることを決意したファナルシーズは、こちらが却って恐縮するほどに、自らのことを打ち明けてきた。
そうして……シヲンは、気づいてしまったのだ。
ファナルシーズが生まれ持って蓄えていた知識の種類が、ふたつに大別できることに。
前世の記憶と思しきなかでも、ファナルシーズが蓄えている知識には二種の違いがあった。
すなわち、知識として吸収したものと、自らが肌で感じて会得したものとが、だ。
その時代は多岐にわたり、あまりにも分散されていた。
だから、最初シヲンは、ファナルシーズが転生ごとの記憶をすべて蓄えているのではないか

と思ったのだ。

しかし、すぐにそれはおかしいと気づいた。

彼から聞かされる、記憶の内容は、常に同じ距離感で語られていたからである。

二千年近く前のことも、八百年ほど前のそれも。

前世の記憶を抱え込んだまま、生まれ変わるという話自体、荒唐無稽なものだから、そうした稀有な存在であるなら、転生ごとの記憶のすべてを持っていると言われても、確かにおかしくはないのだろうが……それ以上に得心がいく理由に、シヲンは気づいてしまったのだ。

すなわち、ファナルシーズが、千年以上の時を生きた、柱神の生まれ変わりであることに。

俄どころか、養い親を相手に口にしている今ですら、あり得ないという思いの方が強く、信じがたいというのが正直なところだった。

神籍に加わった者が、輪廻に身を投じるなど、可能性としても、聞いたことも思いついたこともない。

しかし、そんなあり得ないとしか思えぬことが、不思議と確信として、頭に根付いてしまったのだ。

そうなったら、シヲンは、その真偽をナセルティーノに問いただされずにはいられなかった。

その、結果――。

もたらされた答えは。

「そう……なのですね」

最早、確認の意味しか持たぬ言葉を発したシヲンの前で、ナセルティーノは苦しげな顔で、しかしうなずくことも、かぶりを振ることもできぬ様子で立ちつくしていた。

恋敵である女性を、憎むより先に、彼女に纏わる様々なことを知り得たのは、果たして幸運だったのか否か――判断できぬまま、それでもヴィッシャーナは知った事実ゆえに、ひとつの道を選択した。

恋いこがれる男性が、一途に想いつづける女性――。

雪姫フィオルシェーナ。

紫属の第三位に座す柱神。八世紀も前に死別した恋人ただひとりを、ひたすらに想い続けている稀有なる美姫。

人間として生まれ変わったかつての恋人を、見守り続ける……ヴィッシャーナには理解できないひと。

なぜ、手を伸ばそうとしないのか。

かのひとは、常世ではなく、この現世に存在するというのに。

理由は、自分の恋うるひとや、精霊たちから聞かされたけれど、到底納得はできない。

人間としての幸福な人生？

呪いに等しい長い生を、再び味わわせたくないから？

そんなものは綺麗事だ。

生きている『彼』は、そんなことは望んではいない。

夢でしか会えぬ彼女を、彼もまた一途に想っているではないか。

恋うるひとに、手が届くかもしれない——その可能性の前に、後の約束された苦痛が、どれほどの意味を持つだろう。

（貴女は、「彼」のことがわかっていないのね……）

孤高の美姫に、哀れみさえ覚え、けれどヴィッシャーナはあくまで自分のために、自らの恋の成就のために、禁忌とされる一歩を踏み出すことを選択した。

（貴女が動かないのなら、わたしが「彼」に手を差し伸べよう……）

彼女の存在が、過去にしか存在しない幻などでないと知れば、彼が躊躇うことなどあり得ないのだから。

（わたしの恋のために、「彼」の恋のために——）

罪を犯すことなど、何でもないことだった。

◇　◇　◇

生真面目であるがゆえに、自らを選んだ半身たる神宝の重みに押しつぶされた男が、今まさに息を引き取ろうとしていた。

千年には、二世紀ほども足りない生は、しかし男にとっては長すぎた時間だった。

不甲斐ないとも、情けないとも、我ながら思うものの、これが限界だった。

かつて、何の冠詞もなく『一位さま』と呼ばれた存在――雷皇の異名を持つ紫属の柱神の後釜としては、自分はあまりにも役者不足だった。

半ば伝説と化した御柱の半身であった神宝『紫雷』は、桁外れの力を備えており、かのひとの次に選んだ自分に、過ぎたる力を与えてくれた。

……手に余るほどの。

使いこなせるような力ではなかった。振り回され、制御することだけに腐心し、それでも扱いきれなかった。

暴れ馬より、タチが悪い。

紫雷は自分を振り落とし、自由の身となるために力を放つわけではなく、ただ純粋に持てる力を発揮していただけなのだから。

認めたくなくとも、認めざるを得ない。

自分は、紫雷に相応しからぬ半身だったのだ。
幾度も、その力を制御できずに暴走させた。周囲に被害が出ぬようにと、人里は勿論、眷族たるひとたちとさえ距離を置き、紫雷の力を必死に宥めることしかできずに過ごした……数百年もの時間。
いっそ、自分にこんな苦しみを押しつけた紫雷を憎めれば楽だったかもしれない。
人間であった自分を、全く別の存在に生まれ変わらせ、そのくせ強大すぎる力で、心どころか命までも削り尽くしてくれた、紫の……額飾り。
憎むのは容易かったかもしれないが、そうはできなかったのは、やはり紫雷と自分の間に紡がれた絆を愛しく思わずにはおれなかったせいだろう。
けれど――。
（愛しい……紫雷……）
その想いに嘘はない。
それでも、だ。
（お前の力は、強すぎる……）
制御できるだけの力量を持たぬ存在が手にしたなら、お前は破滅をしか相手に運ばない――
それもまた、揺るがせぬ事実なのだ。

だから――。

年若い、激情を瞳にたたえた眷族の女性から、持ちかけられた提案に、乗ることを決意した。

それは――かつてないほどに、世界に愛された魂を、無明の闇に叩き落とす行為かもしれない。

稀有なる世界の宝たる存在が愛した女性の願いを踏みにじる行為かもしれない。

それでも、矮小な自分は、強大な力を持つがゆえに、孤高であることを強いられる存在を思いやるより、自分と同じ塗炭の苦しみを味わうに違いない同朋を生み出さぬことを選ぶのだ。

紫雷に相応しい存在が、魂が、すでにこの世にあることを知るからこそ。

「……やあ、来たね」

間に合った――安堵の息とともに、訪問者に声をかける。

「ええ、来たわ」

答えるのは、位階を得るには至らない、年若い黄緑属の眷族。

黄金の髪、黄金の肌、双眸だけが半身たる神宝と同じ若草色に輝く美女――。

「では、頼むよ」

そう言い、彼は自らの半身を、紛うかたなき自分の意思で、彼女――ヴィッシャーナに委ね

た。

紫雷のせいで、命をすり減らしたというのに、どうしても恨む気持ちは湧いてこない。

なぜだろう、と自問して、彼はあまりに単純な答えに苦笑した。

どれほどの苦しみを背負わされようと。

どれほどの痛みを味わわされようと。

恨み、憎み、呪うには——。

この世界は美しすぎて、愛しすぎる。

その視界を与えてくれたのは、紛れもない紫雷だった。

(敵わないな……)

だからこそ、心から——祈った。

自らの意思で手放した、半身たる神宝の幸を。

そして、この行為によって、巡る因果律のもたらす流れが、不幸ではなくその逆であることを。

(幸いたれ)

それは、彼のせめてもの願い——。

7　そして歯車は回る

政務に忙殺される日々が、すでに当たり前になって久しいある夜のこと。
ファナルシーズ・アスティス・イアン・アルスティニア――このアストニア帝国の皇太子である青年は、ようやく処理を終えた書類を前に、少しばかり思案していた。
すでに深更――妻や息子の顔を見に行ける時間帯ではない。
明日も控えている仕事のことを思えば、すぐにでも寝室へと向かうべきなのだろうが、なぜか心がざわめき、そうする気になれない。
窓の外に、月は見えない。
新月の夜空に、星々だけが輝いている。
だから、だったのかもしれない。気まぐれを起こす気になった。
どうせ、すぐには寝付けないのだ。星空の下の散歩を楽しんだとしても、誰にも文句は言われまい――そう思い、彼は庭に足を向けた。

月が出ている夜には、絶対に選ばぬ行為だった。
月を見ることを、彼はある時期を境に止めてしまったのだから。
月そのものに罪はない。
わかっていても、月はあまりにも、恋うるひとを思わせて、そのひとの不在を知った今、似ているからこそ、目にしたくはない。
前世の記憶の中にしか存在しない、美しいひと。
銀の髪に紫水晶の瞳を持つ、月の化身のようなひと。
彼女はいない——今、自分が生きているこの世界には。
絶望に身を任すことができたなら、それはある意味幸福だったかもしれない。
だが、ファナルシーズの立場が、否、彼自身が、そんな怠惰を認めることを許さなかった。
いない者を恋うて、一体なんの意味を持つというのか。
心がいかに血を流そうが、彼はそんな昏い安逸に酔いしれるほど、自らに甘くはなれなかった。
ただ、生きる——務めを果たしながら。
だが、月を目にする度に、胸を襲う痛みに慣れることはできず、彼はだから、月を厭うようになった。

それが美しければ、美しいだけ、尚更に。

だが、月がなくとも、世界が美しいことは確かで、自分にとっての月が、影でしかないからといって、世界を否定する気にはなれない。

いや、してはならないと思っているのだろうか……？

とりとめのない思考に、ファナルシーズは思わず苦笑した。

「随分、感傷的になっているな」

月がない夜だから、大丈夫だと思っていたが、あるいは見えないからこそ、より強く意識してしまったのか。

あまり、心地のよいことではない。

「眠れ、ということかな……」

確かに、答えの出ないことをあれこれ考えているより、そのほうが前向きというものだろう。

自身にそう言い聞かせ、寝室へと歩き出そうと、踵を返した、まさにその瞬間のこと——。

背後から、風を切る——羽ばたきが、聞こえた。

（こんな夜中に、鳥……？）

怪訝に思い、反射的に振り向いたファナルシーズは、星明かりのみが世界を照らす夜の空に

浮かび上がる、純白の幻獣の姿を認め、息を呑んだ――。

それは、伝説の翼馬――。

目を瞠るファナルシーズの前で、それは先ほどの羽ばたきが嘘のように、音ひとつたてずに空を滑り、地上に降り立った。

その背にあるは、蜜の化身のごとき美女。

金の肌に金の髪、星明かりが照らすのみであるにも拘わらず、はっきりと色をたたえて輝く双の瞳だけが、若草色に輝いている。

（ああ、これが――）

以前、シヲンから聞かされた言葉を思い出しながら、ファナルシーズは得心する。

（これが、神の瞳というものか――）

と。

声もなく、しばし見つめ合った。

先にその沈黙を破ったのは、この世の天と地の狭間――空を支える御柱たる女性だった。

「ご機嫌よう、かつて雷皇と呼ばれた御方」
聞き覚えはないものの、心にすとんと落ちてくる呼びかけに、ファナルシーズは微笑みながら応じた。
「ようこそ、麗しき御柱の君」
至高の御方と相まみえることのかなったこの感動は、言葉を尽くしても言い表せるものではございません――。
膝を折り、礼を取りながらそう続けると、蜜の化身は可笑しそうに口元を綻ばせた。
「お上手ですこと。心に決めた御方がなければ、揺れずにはおれぬお言葉ですわね」
人間には真似できない、艶やかに過ぎる笑みをたたえ、女性は優雅に翼馬の背から降りた。
迷いのない足取りで、蜜の化身が近づいてくる。
その気配とともに、近くなるある波動に、なぜか鼓動が速くなるのを、ファナルシーズは困惑とともに受け止めていた。
「時間が許せば、貴方の優美で詩的な言葉に酔うのも素敵なこととは思いますけれど、生憎わたしにも貴方にも、あまり時間はございませんの」
意味が、わからない。
なぜ、柱神が自分に会いに来るのか――その用件とは何なのか。

なにより、彼女のそばに感じる、もうひとつの無視しがたい気配は何を意味しているというのか。

だが、ファナルシーズが問うより先に、蜜の化身はその答えを明らかにした。

「これを」

優雅に、彼女が懐から取り出した品を目にした瞬間、彼は凍りつくような衝撃を受けた。

それは、夢で見たものとは、明らかに形状が違っていたが、嵌めこまれた紫水晶の放つ気配は間違えようのないもの――。

かつて、夢の中の自分が、肌身離さず身につけていた……。

「……紫雷……」

覚えず、その名を口にすると、蜜の化身は嬉しそうに頷いた。

「そうです。わたしは、この至宝をお渡しするために、今宵参りました」

胸が、締めつけられる。

感情が寄り添うことのない、単なる情報としか受け取れずにいた記憶の中、たったふたつの例外たる存在の内のひとつが、目の前にある。

かつて、分かちがたい絆で結ばれていた半身――そして、今、また、同じほどの強さで自分を求めている、神宝【紫雷】……。

強烈な、引力を感じた。

だが、かつての自分とは違う知識がファナルシーズにはあり、紫雷と同じか、あるいはそれ以上の重みを持つ存在の不在を確信するがゆえに、彼は手を伸ばさなかった。

「麗しき御方の申し出を退けるのは、心苦しいものの、わたしには守るべき国と民がございます……神たることと、人間の施政者たることが、並び立たぬ以上、わたしがその至宝を手にすることはできますまい」

はっきりと、拒絶の意思を明らかにし、答えた。

不老も長寿も神の力さえも、魅力に思わない者にとって、神への誘いは無意味でしかない。

それが読み取れぬほどに、目の前の柱神が幼いとは思えなかったが、若さゆえに神宝とその半身の絆を絶対視している可能性は否めない。

確かに、今間近に感じる紫雷に惹かれる思いは強い。

だが、もうひとつの……否、もうひとりの存在なくして、新たに絆を構築するには、神宝のもたらす運命は重すぎる。

神たる力を手に入れて、あの月の生まれ変わりを捜すというのも、あるいはひとつの選択肢かもしれない。神の一員に迎えられた自分ですら、人間として転生がかなったのだ。それは不可能ではないかもしれない。

けれど――かつて『雷皇』と呼ばれていたらしい自分と、今の自分とが明らかに別の存在である通り、生まれ変わった彼女と、自分が焦がれるあの女性とが、同じ存在であるはずがないのだ。

焦がれる存在は、ただ、彼女ひとり――。

髪の色ひとつ、瞳の色ひとつ、違っていたとしても、自分は違和感を覚えずにはいられないだろう。もとは同じであったのだからと、自分にいくら言い聞かせたところで、果たして納得できるだろうか。

そんな自信はない。

そして、そんな曖昧な希望を追うためだけに、千年の時を受け入れる覚悟も、意思も――ありはしない。

だから、ファナルシーズは拒絶の言葉しか選べはしないのだ。

「ありがたすぎるお言葉だとは思いますが――」

提示された可能性を、断ち切るために口を開いた彼の顔を、興味深げに見つめていた蜜の化身が、思いもかけない囁きを落としたのは、次の刹那のことだった。

「存じておりますわ。貴方は月の影を追うような真似はなさらない……けれど、月そのものなら……如何なさいます？」

意外すぎる言葉に、さしものファナルシーズも言葉を返せなかった。
口を開けたまま、阿呆面のまま固まるという醜態こそ晒さずにすんだが、彼の動揺を、蜜の化身は見て見ぬふりなどしてはくれなかった。
「……貴方が【月】と見なす御方が、未だにご健在である、と申しましたら……？」
どくり、と胸が激しく脈打った。
目眩がした。
物心ついて以来、夢の中でしか会えない女性に、ただただ焦がれ続けてきた。
夢は現と常世ばかりでなく、過去と未来をも繋ぐ不可思議な世界だと、聞いていたから……いつか、会える日が来ると、その時には決して放さないと誓った。出会ったその時、彼女がいかなる身分であれ、どのような立場にあろうとも、手に入れ、守りきれるようにと、努力しつづけた。
稀有なる異能【夢視】を持つ、親友から、「それは前世の記憶です」と、疑うこともできない言葉を浴びせられるまで――。
絶望し、しかし事実を否定できるほどに愚かしくあることもできなかった自分は、夢に出てくる彼女が、現には存在しないことを確かめるために、シヲンに記憶と思しき内容を語り、かつての自分が生きていた時代を特定させようとした。

結果、告げられた内容は、最低八世紀は昔である——という、絶望的なものだった。

過去世の記憶だということで、彼女の生存はとうに諦めていたつもりだったが、はっきりと時代を確定されたことで、欠片も期待は抱けないのだと思い知らされた。

そう。

そのはずだったというのに、だ。

今聞かされた、蜜の化身の言葉は、なにを告げているというのか——。

くすり、と彼女が笑った。

誘うように、唆すように——。

「貴方が月と見なす御方は、名残でもなく面影でもなく、今もこの世に存在していらっしゃいますよ——？」

その言葉に、ファナルシーズは決断した。

頭から信じたからではない。

確かに彼女が真実を語っているのだと、短い時間で見抜いたからこそ、そして、だからこそ、彼女が最初に告げた「時間が許せば、貴方の優美で詩的な言葉に酔うのも素敵なこととは思いますけれど、生憎わたしにも貴方にも、あまり時間はございませんの」という言葉に意識を向けた。

「……つまり、この訪いは、公には認められない類いのものである、と……そう認識していいものだということでしょうか？」

得たりとばかりに、若き柱神の女性はうなずいた。

「ええ、その通りですわ。これは、ただ一度きりの機会……次はありませんわ。貴方の月たる御方と、わたしを除くすべての柱は、貴方に提案することさえ、認めはしないでしょうから」

自分以外の柱神が望まぬ提案だと、明らかにして尚、彼女の口調に変化はなかった。

それは、覚悟を決めた者ならではの反応。

ならば、自分も、決断すべきだろう。

だから——ファナルシーズは、覚悟を以て、答えを口にした。

夢の中にしか存在しないと思っていた月の存在——。

彼女が、もし現のものであったなら。

望むことは、ひとつしかなかったのだ……。

エピローグ

アストニア皇宮の奥深く――。

あらゆる危険を遠ざけた安全な庭の一画で、今年五歳になる皇子が、守り役を相手に遊んでいる。

テラスに設けられたテーブルを囲み、その様子を見守るのは、皇子の母親たる女性と、彼女にとって唯一(ゆいいつ)とも言える異性の友人たる神官のふたりだった。

「……大きく、なられましたね」

目を細めながら、シヲン・オーダックが友とも主(あるじ)とも呼べるひとの息子を見つめ、呟いた。

父親そっくりの金髪と顔立ちの皇子は、母から受け継いだ灰青色(かいせいしょく)の瞳(ひとみ)をきらきらと輝かせながら、守り役の青年に何かをねだっている。

「……日ごとに手に負えなくなります。遊び相手の子供たちをまいては姿を隠すのが楽しいらしく、ウァーレントにも苦労をかけておりますわ。一体、誰に似たのか……」

父から受け継いだ優秀な頭脳を、最近では専ら悪戯に用いるようになった皇子の行動を、嘆くのは、皇太子妃ユーランディアだ。

ふ、とその双眸が、翳る。

「いえ、正しくあの方の血を受け継いでいると言うべきでしょうね……隠れ鬼が得意なところなど、特に」

「妃殿下」

気遣うように、声をかけてくるシヲンに、ユーランディアは小さくかぶりを振った——悩みを払いのけるように。

「ごめんなさいね、愚痴をこぼしてしまったわ。どうにも、他の方には聞かせられない話だから……」

詫びを口にするユーランディアに、シヲンは「いいえ」と答えた。

「わたくしなどでよろしければ、いくらでも話してくださってかまいません。それこそ愚痴でも恨み言でも、なんであれ。すべての咎は、あの方にございますから」

痛みを覚えつつも、軽口を叩ける自分に気づきながら、シヲンは柔らかく微笑んだ。

そう……それだけの時間が、流れたのだ。

あの日——皇太子ファナルシーズが突然姿を消した時から。

（もう、二年になる……）

蜂の巣を突く騒ぎのなかで、しかしシヲンだけは、それが事件ではなく、かの皇太子の意志であることを知っていた。

ファナルシーズが姿を消した翌日、届けられた差出人の名のない手紙ゆえに。

上質な手漉きの便せんには、ただ一言が記されていた。

『月を、獲りに行く』

と――。

月の影は追わないと、言っていた彼が残した言葉は、今も解かれることのない謎として、シヲンの胸に刻まれている。

だが、その謎が解ける日も遠くはない、と彼は思う。

「……あの方が」

ぽつりと洩らされた言葉に、シヲンはユーランディアを見つめた。

「あの方が姿を消された時、驚きはしたけれど、わたくしは不思議と納得もしていたように思うわ。出会ったころから、なんとはなし、気づいていたのでしょうね……あの方は、確かにあの方ではあるけれど、ここに属する方ではないと。客人のようなものだと……だから、正直なところ、悲しみは覚えなかった」

淡々とした口調で語るユーランディアは、真実そう思っている様子で微笑んだ。
「あの方は、あの方が本来属する世界へ帰られたのだと思うの。わたくしに、あの子を与えてくださったこと、いくら感謝しても足りないほどよ。だから……シヲン。いつかあの方と会うことがあったら、その時は、わたくしたちは大丈夫だと、そう伝えてはくれないかしら？」
唐突な言葉に、シヲンはユーランディアが気づいていることを知った。
「……決めたのでしょう？」
なにを、と尋ねる必要もないほどに、その言葉は真実そのものを射抜いていた。
真摯な眼差しを、自分に向けてくるユーランディアに、彼は「ええ」とうなずいた。
そう——決めた。
十日ほど前に自分を訪れた至尊の客人の申し出を受けることを。
そうして、自分は必ず、消えた彼との再会を果たすのだ——。
いつか、きっと——その日は恐らく、遠くはない。

時を遡ること二年——。

その日、アズアーダ王国の北の国境に程近い『針の森』の、人間の目には触れ得ぬ屋敷の女主は、衝撃に戦慄いた。

精霊たちの前触れもなく、屋敷を訪れた青年は、そんな彼女の前に、恭しく跪いている。

輝く黄金の髪、透けるような白皙――すでに人間のものではなくなった、深く澄んだ紫の双眸。

数日前、女主――フィオルシェーナが見失い、必死に行方を捜していたひとは、彼女が最も望まぬ道を選んだ上で、今、目の前にいる。

「……なぜ。なぜです……」

何度もかぶりを振りながら、掠れた声で問いかけるが、本当に答えを求めているのかどうか、彼女自身にもわからなかった。

（人間としての穏やかで優しい生を、今度こそ歩んでほしかったのに……）

見失ったのは、ほんの数日――その間に、いったいなにがあったというのか。

悲しみが、胸の奥から湧き上がる。

彼――ファナルシーズの瞳は、すでに神たる者のそれに変化している。

それは、彼が神宝を受け入れ、誰かと契りを交わしたという証――選ばれただけであるなら、瞳の色は変わらないのだから。

（誰が……どうして……っ）

かつてすべての柱神の中で、最も長く生きた恋人――呪いのような時間から、ようやく解放されたはずなのに。

だからこそ、八世紀もの時を経て、生まれ変わった彼を、ただ見守るだけと心に決めた。妻を娶り、子を為し、彼は平凡とは言い難いが、人間としての幸福を甘受するはずだったのだ。

それを、それだけを望んでいたというのに――。

「なぜ……」

意味もなく、「なぜ」ばかりを繰り返すフィオルシェーナを、跪いたファナルシーズが見上げてきた。

その美しくも、間違いようのない、熱を帯びた眼差しに、彼女は知らず、びくりと身を震わせた。

じわり、と衝撃とは違う感情がしみだして来る。

（いけない）

口を開きかける青年の様子に、危機感が募る。

（言わせてはいけない……聞いては、いけない）

「麗しき、雪の姫……ですが、貴女はわたしにとって――」

甘い囁きに、頭の芯がじん、と痺れる。
（聞いては駄目……捕らわれてしまう！）
この青年は、たとえ同じ魂を持っていようとも、恋人だったあのひとではないのだ。
「言わないで！」
悲鳴のような叫びを上げて、フィオルシェーナはその場から逃げ出した。
逃げるべきではなかったと、すぐに悔いることになるとも知らず……だが、全身を支配する理由のわからぬ恐怖ゆえに、彼女は走ることしかできなかった。

「……捕まえた」
長い腕に絡め取られてなお、フィオルシェーナは抗うことを止められなかった。
「いや……放して」
すぐ近くに聞こえる声が、ただただ恐ろしい。
見上げることさえできない——彼の眼差しを受けるのが怖い。
「お願いだから、放して」

俯いたまま、懇願するが、腕が解かれることはなかった。
ファナルシーズの声が、拒絶の言葉を紡ぐ。
「できません」
そう、はっきりと。
「月姫――」
耳元で囁かれ、びくりと震えた。
吐息の熱が、触れた肌から染みこんでくる。
「わたしにとって、貴女は月です。わたしの心を捕らえて離さない、唯一の……」
声が、言葉が鎖と化して、フィオルシェーナの心を縛りつける。
「……諦めてください」
腕にこもる力が増した――苦しいほどの抱擁に、彼女は目眩を覚えた。
そんな彼女に、ファナルシーズは熱い楔となる言葉を告げた。
「そしてわたしを、受け入れてください――」
と――。
その日、月はただひとりの青年の腕に捕らわれた。

あとがき

初めまして、もしくはこんにちは。
前田珠子です。
この度は『空の呪縛』をお手に取っていただき、ありがとうございます。
さて、今回の『空の呪縛』ですが、『天を支える者』と同じ世界であります。
とは言いましても、時代が全然違う上に、柱神にまつわる設定が、微妙に違うため、番外編ではなく、独立したタイトルとさせていただきました。
早い話が、『天支』で頻繁に記述する【暗黒時代】以前の世界なのですね。
だから、『天支』より、柱神の数が多い上、寿命も長い――しかも、選定者が存在しません。
つまり、ナルレイシア嬢は、この時代に生まれていたら、厄介な役目を背負うことはなかったのであります（笑）。
第一話の『恋獄の緒』は、別冊Ｃｏｂａｌｔに掲載したものに、加筆修正を加えたもので

す。

ちょっと大人（？）な話を――ということで、実は『天支』より先にあった『空の呪縛』の出番となりました。どこが大人かといいますと……まあ、その設定が、ですね。以前友人が口にした、言い得て妙な言葉を借りますと「柱神さまに、清らかさんはいないのね」――だからです。

詳しくは、本文にてお確かめください。

第二話の『月を、恋う』は、書き下ろしです。第一話目から、なんと八百年以上後の世界で、一話目に登場したひとは、ほとんど退場なさってます。あるヒトの生まれ変わりを、最初主役として書き始めたのですが……このヒトが、全く動いてくれなかったため（本命以外のことは、かなりどうでもいいと思って、しかも猫を被っているのが原因と思われます）、急遽、友人のシヲンに語りを受け持ってもらいました。

心配をかけるくせに、思い立ったら即実行という、かなり扱いにくい友人のせいで、シヲンはこれからも振り回され、苦労させられることになります。

この第二話を書いている間中、頻繁にわたしを困らせてくれたのは、実に賑やかな空模様――もっとはっきり言いますと、雷でございました。

落雷による停電が原因で、パソコンが壊れるというのは、まず滅多にないこととはわかって

いるのですが、三人も、被害にあったという知り合いがいますと、怯えずにはいられません。空からあの独特な音が聞こえ始めると、慌てて電源を落とし、アダプターを外し、遠ざかるまで小休止――というのを、一体何度繰り返したことか。

実はこのあとがきも、充分に遠ざかったのを確認してから書いている状況です。

いくら雷と縁深い（という設定は、天支でも同じです）紫属の柱神の話を書いているからと言って、現実に雷とお近づきにはなりたくありませんでした。これからは是非、縁遠くありたいと思います。

今回も、挿絵の明咲トウルさまと関係者の皆様には、大変お世話になりました。この場をお借りして、心からお礼申し上げます。

次回は久しぶりに『聖石』の予定です。多分お師匠さまコンビの番外編になるかと……ただ、どちらのお師匠さまたちになるかはまだ未定です。

それでは、次の本でまたお会いできますように――。

平成十九年　夏

前田　珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



空の呪縛

COBALT-SERIES

2007年8月10日　第1刷発行
2007年11月10日　第2刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　礒田憲治
発行所　株式会社集英社

〒101−8050
東京都千代田区一ツ橋2−5−10
(3230) 6268 (編集部)
電話　東京 (3230) 6393 (販売部)
(3230) 6080 (読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2007　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN978-4-08-601052-8 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

本好き少女の波乱万丈ファンタジー！

前田珠子 〈天を支える者〉シリーズ

イラスト／明咲トウル

天を支える者

天を支える者2

天を支える者3

天を支える者4

天を支える者 古懇唄

天を支える者 古懇唄2

天を支える者 古懇唄3

天を支える者 古懇唄4

天を支える者 古懇唄5

天を支える者 罠は、蜜の味



〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。

前田珠子 〈聖石の使徒〉シリーズ

イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒
其は焔をまとう者

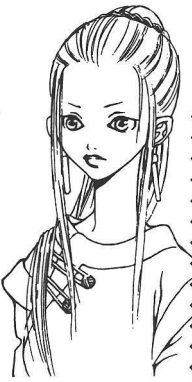
聖石の使徒
其は力を放つ者

聖石の使徒
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
揺籃の瞳

聖石の使徒
蒼の組木箱





〈好評発売中〉 コバルト文庫

美少年コンビが暗躍する魔性を斬る!

前田珠子

〈魅魎暗躍譚〉シリーズ

イラスト／田村由美

魅魎暗躍譚
碧眼の少年(前編)(後編)

髪と瞳の色を奪った魔性を探す甲斐。途中、行き倒れの志摩を助けたことから、没落した名家の当主・隠岐と知り合って!?



月乃守家の姫君・遠江(とおとうみ)は美少女だが相当の猫かぶり。偶然異母兄の甲斐と再会を果たすが、魔性の陰謀が彼女に迫り…!?

魅魎暗躍譚
月読見の乙女(前編)(後編)

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ！

前田珠子 〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／廣門 潤



漆黒の魔性

白焔の罠

柘榴の影

紫紺の糸（前編）（後編）

翡翠の夢1～5

鬱金の暁闇1～3

女妖の街 破妖の剣 外伝①

ささやきの行方 破妖の剣 外伝②

忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③

時の螺旋 破妖の剣 外伝④

魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤

呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥

ラブ★コン
LOVELY COMPLEX

—恋の嵐が吹き荒れる!編—

大人気マンガの胸キュン♥ノベライズ、最新刊・第四弾!

大谷が受験一色で、専門学校組のリサはちょっぴりさびしい。バイト先のチビッコ男子・小堀と仲良くしていたら、大谷の怒りが爆発! 凸凹カップル破局の危機…!?



シリーズ好評発売中!

ラブ★コン
LOVELY COMPLEX

毎日ケンカばかりのリサと大谷。でもリサは大谷を意識しはじめ!?

ラブ★コン
LOVELY COMPLEX

—恋の歯車、回したろかー編—

リサの決死の告白も激にぶの大谷はさくっとスルー。恋の行方は!?

ラブ★コン
LOVELY COMPLEX

—恋する乙女は止まらへんでー!編—

ついに恋人同士になったリサと大谷。だが、リサにライバル出現!?

大人気コミック
『ラブ★コン』を完全小説化(ノベライズ)!!
大好評発売中!!

コバルト文庫

ココロ直 原作 中原アヤ

〈好評発売中〉
コバルト文庫

2007年度
ロマン大賞受賞作家
デビュー!!

夢でしか逢えない君を、
僕はいつだって愛していた——!

眠れる島の王子様

夏埜イズミ
イラスト／樹　要



16歳の少年・文鳥は親友・柊の趣味につき合って古文書に書かれた『魔法』を試す羽目に。すると文鳥の夢には、7歳の少女・花梨が現れた。翌日も翌々日も、二人は夢で逢うが…!?

コバルト文庫 雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」

募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の新しい書き手の方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人賞の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、自分の才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!

〈大賞入選作〉
正賞の楯と副賞100万円(税込)

〈佳作入選作〉
正賞の楯と副賞50万円(税込)

ノベル大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙95～105枚。
【締切】 毎年7月10日(当日消印有効)
【応募資格】 男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt12月号誌上(および12月刊の文庫のチラシ誌上)。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10 (株)集英社
コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる「ノベル大賞・読者大賞」(大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円)の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙250～350枚。
【締切】 毎年1月10日(当日消印有効)
【応募資格】 男女・年齢・プロ・アマを問いません。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt8月号誌上(および8月刊の文庫のチラシ誌上)。大賞入選作はコバルト文庫で出版(その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします)。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10 (株)集英社
コバルト編集部「ロマン大賞」係

★応募に関するくわしい要項は隔月刊誌Cobalt(1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売)をごらんください。

9784086010528

ISBN978-4-08-601052-8

C0193 ¥438E

1920193004380

定価 本体438円＋税



コバルト文庫